

とき  
たば  
ひら

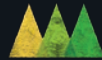
# 時の束を披く

ないじえる芸術共創ラボ展

— 古典籍からうまれるアートと翻訳 —

ないじえる芸術共創ラボ展

時の束を被く — 古典籍からうまれるアートと翻訳 —



ないじえる芸術共創ラボ

アートと翻訳による日本文学探案イニシアティブ

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
国文学研究資料館



ないじえる芸術共創ラボ展

時ときの束たばを披ひらく

— 古典籍からうまれるアートと翻訳 —



ないじえる芸術共創ラボ

アートと翻訳による日本文学探検イニシアティブ

## ごあいさし

ないじえる芸術共創ラボ展「時の束を披くー古典籍からうまれるアートと翻訳ー」に、よつこそお越しくございました。

ないじえる芸術共創ラボとは、二〇一七年十月に、文化庁の委託を受けて始まったプロジェクトで、誰にでもひらかれた歴史的文化的資源である日本の古典籍を、もつと多くの方に自由な発想で活用していただきたいという想いで続けてまいりました。

この展示では、約三年半にわたり、世界の第一線で活躍するクリエイターたちと、当館教員をはじめとするさまざまな分野の研究者とが、ともに古典籍をひらき、その魅力を探求してゆこうとする実験の過程で起こった〈化学反応〉をご覧いただきます。

クリエイターたちが、古典籍を発想の源として創作した、素晴らしい作品世界をじっくりとご覧いただきながら、彼らがその発想へ至るまでに様々な影響を及ぼした古典籍をも鑑賞し、創作の過程や、日本の古典がもつ大きな可能性をお楽しみいただきたいと思います。

古典籍は、その中に綴られている内容の世界だけではなく、その制作に携わった人々、それを手にし、読み、写し、保管し、あるいはどこかへ紛らわせてまた見出す、という書物自体が内包する記憶と時間を有しています。その「時の束」を、研究者やクリエイターたちと共に披き、過去と現在、未来に思いを馳せてみてください。

二〇二二年二月十五日

国文学研究資料館 館長

ロバート キャンベル

国文学研究資料館 館長

ロバート キャンベル



# 目次

ごあいさつ	2
凡例／参考文献	6
国文学研究資料館と古典籍について	8
ないじえる芸術共創ラボについて	10
ないじえる芸術共創ラボのあゆみ	12
<b>小説家 川上弘美</b>	16
作品紹介・ワークシヨップについて・関連古典籍図版および解説	16
小論文『伊勢物語』享受史と鉄心斎文庫 岡田 貴憲	29
コラム01「プロジェクト立ち上げのころ 小林 健二	32
<b>アニメーション作家 山村浩二</b>	34
作品紹介・ワークシヨップについて・関連古典籍図版および解説	34
小論文 夢を描くー古典における夢についてー 入口 敦志	47
コラム02「古典籍を未来へつなぐ小さな歩 束 芋	50
<b>劇作家・演出家・俳優 長塚 圭史</b>	52
作品紹介・ワークシヨップについて・関連古典籍図版および解説	52
小論文 黄表紙と戯作者京伝の魅力的な陰影 有澤 知世	67
コラム03「長塚圭史「KYODEN'S WOMAN」アナクロニズムの夢」 「戯作的」中央線文化が育んだ「ないじえる芸術共創ラボ」 延江 浩	70
<b>現代美術家 梁 亜旋</b>	72
作品紹介・ワークシヨップについて・関連古典籍図版および解説	72
小論文 魅惑の絵巻 恋田 知子	83
コラム04「ブックディレクターから見た「ないじえる芸術共創ラボ」 幅 允孝	86
<b>画家 松平 莉奈</b>	88
作品紹介・ワークシヨップについて・関連古典籍図版および解説	88
小論文 画譜のゆくえー絵手本についてー 木越 俊介	99
コラム05「「投企する古典性」としての「ないじえる芸術共創ラボ」 飯倉 洋二	102
<b>翻訳家 ピーター・J・マクミラン</b>	104
作品紹介・ワークシヨップについて・関連古典籍図版および解説	104
小論文『扇の草子』の魅力ー三つの扉と三つの世界ー 安原 眞琴	115
コラム06「ないじえるというプリズムで日本文化を再考察する重要性 塩野入 弥生	118
<b>情景作家 山田 卓司</b>	120
作品紹介・ワークシヨップについて・関連古典籍図版および解説	120
小論文「東海道」の芸能と文学ー江戸時代の旅と浮世絵ー 山下 則子	129
コラム07「デジタル発和書の旅路 高羽 将人	132
<b>ビジュアルデザインスタジオ WOW</b>	134
古典籍との（基本的な）ふれあい方について	138
新日本古典籍総合データベースの使い方	140
出品リスト／奥付	142

- 本冊子は、国文学研究資料館の企画展示として、二〇二二年二月十五日(月)から四月二十四日(土)まで、国文学研究資料館展示室において開催する「ないじえる芸術共創ラボ展」時の束を披く―古典籍からうまれるアートと翻訳―の展示解説である。
- 本展示は、国文学研究資料館が二〇一七年十月より実施する事業「ないじえる芸術共創ラボ―アートと翻訳による日本文学探素イニシアティブ―」の成果展として企画された。
- 本展示および本冊子は、文化庁「日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業」の二環である。
- 本冊子は、各AIR・TIRによる創作と、その発想の源となった古典籍の世界観を表現するため、①各クリエイタープロジェクト説明②クリエイターの作品紹介③関連古典籍解説④展示古典籍の文学史的意義を述べる小論文をひとつのパートとし、各パートの間には、本プロジェクトに関わった経験がある執筆者による「コラム」を配した。そのため、掲載順は、必ずしも展示の配列とは一致しない。
- 展示会場や誌面に記しきれなかったプロジェクトの過程や成果は、公式WEBサイトで公開しており、各ページへのリンクをQRコードで示した。
- 所蔵先を明記していない古典籍は、すべて国文学研究資料館所蔵本である。

執筆者一覧

- ありさわともよ  
有澤知世(国文学研究資料館特任助教)
- いりぐちあつし  
入口敦志(国文学研究資料館教授)
- おかだたかのり  
岡田貴憲(国文学研究資料館助教)
- きこしげすけ  
木越俊介(国文学研究資料館准教授)
- くめしおり  
桑汐里(国文学研究資料館特任助教)
- こいだともこ  
恋田知子(慶應義塾大学准教授)
- あさのあゆま  
佐藤悟(実践女子大学教授)
- やすはらまこと  
安原眞琴(立教大学兼任講師)
- やましたりのこ  
山下則子(国文学研究資料館教授)

※五十音順、コラム執筆者の情報は各記事に記した  
※記名がない記事は、有澤知世が執筆を担当した

芦澤美佐子「ひたすら生きる 芦澤美佐子歌集」短歌新聞社、一九八九

有木大輔『唐詩選版本研究』好文出版、二〇三三

有澤知世「戯作者の象徴―京伝・三馬に注目して―」『日本文学研究ジャーナル』第7号(二〇一八・九)

五十嵐公二「永納作品の制作年代」『塵界 兵庫県立歴史博物館紀要』第11号(一九九九・三)

大庭卓也編『江戸人、唐詩選に遊ぶ』(久留米大学文学部創立二十五周年記念特別企画御井図書館貴重資料展)『久留米大学文学部』二〇一七

大庭卓也「補説『唐詩選』成立の背景」『久留米大学文学部紀要 国際文化学科編』第32・33合併号(二〇一六・九)

太田昌子編『江戸の出版文化から始まったインターネット革命 絵本 絵手本 シンポジウム報告書』(金沢芸術学研究会、二〇一七)

狩野博幸「鍬形憲斎絵本の検討」『MUSEUM』第338号(一九七九・五)

国文学研究資料館「蔵書印データベース」

国文学研究資料館「図説「見立」と「やつし」 日本文化の表現技法」(八木書店、二〇〇八)

国文学研究資料館編「図説江戸の表現」浮世絵・文学・芸能(八木書店、二〇一四)

児玉幸多「東海道分間延絵図」全24巻(東京美術、一九七七・一九八五)

小林健二「やうきひ物語」と「長恨歌絵巻」江戸時代前期における絵巻製作の様相『天谷女子大図文』第16号(一九八六・三)

小林宏光「中国版画史論」勉誠出版、二〇一七

小川宏光「近世画譜と中国絵画―十八世紀の日中美術交流発展史」(勉誠出版、二〇一八)

斎藤幸雄・同幸孝・同幸成「月夕」江戸名所図会(江戸須原屋茂兵衛等、一八三四・一八三六)

阪口弘之「古浄瑠璃・説経研究 近世初期芸能事情 上巻 街道の語り物」(和泉書院、二〇一〇)

山東京傳全集編集委員会編『山東京傳全集』第1巻〜20巻(べりかん社)

鈴木重三・木村八重子・大久保純「保永堂版 広重東海道五拾三次」(岩波書店、二〇〇四)

鈴木淳「光琳画譜」考『浮世絵芸術』第145号(二〇〇三・二)

鈴木淳「近世絵入り版本講座(ホームページ)」  
<http://teipconnect.rund.edu/tiaku/reiko/index.html>

谷峯蔵「遊びのデザイン―山東京傳 小紋雅話―」(岩崎美術社、一九八四)

谷峯蔵「花咲男」洒落のデザイン―山東京傳画「手拭合」―(岩崎美術社、一九八六)

鉄心斎文庫伊勢物語文華館『鉄心斎文庫所蔵伊勢物語図録 第1集、第21集』(九九・一〇三)

鉄心斎文庫伊勢物語文華館『鉄心斎文庫所蔵菅澤新二コレクション展 IV〜VI』(二〇〇三・一〇〇四)

西尾市岩瀬文庫「古典籍書誌データベース」

福井麻純「中村芳中とその時代―芳中にとつての光琳・俳諧・大坂―」『美学』第52巻第4号(二〇〇一・三)

藤川玲満「秋里離島と近世中後期の上方出版界」勉誠出版、二〇一四

安原眞琴「扇の草紙」の研究―遊びの芸文(べりかん社、二〇〇三)

山口由香「鈴木其の画風形成期における諸派習得の様相について 第二期「繪」落款使用期を中心に」『メタタイプヒアカ 名古屋大学大学院文学研究科教育推進室年報』第9号(二〇一五・二)

山本登朗編『伊勢物語版本集成』(竹林舎、二〇一三)

吉海直人「百人首かるたの世界(新典社新書24)』(新典社、二〇〇八)

※配列は編著者の五十音順による



## 国文学研究資料館と古典籍について



国文学研究資料館WEB <https://www.nijl.ac.jp/>

東京都立川市にあります。略して「国文研(こくぶんけん)」と呼んでください。

半世紀にわたり、明治時代よりも前に日本で「作られた本」を調査、収集しているところです。「作られた本」と書いたのは、印刷されたものだけではなく、人の手によって写されたものも多くあるからです。国文研ではこれらを「古典籍」と呼んでいます。

ひとくちに古典籍と言ってもその内容は様々です。

『源氏物語』『百人一首』といったいわゆる「文学」だけではなく、旅行、医学、料理、デザインなど、様々なものがあります。

ひとつひとつの「本」に、文字や絵で、わたしたちの祖先の知恵や教訓が、あるいは普遍的な欲求や不安、哀しみ、喜び、生と死がつづられています。また、それぞれの「本」が、大切に受け継がれ、もしくは波乱万丈な道を経て、国文研までやってきた「物語」も背負っているのです。

国文研は、国内外の各地に存在する古典籍を広く求め、調査

をし、一点ずつ全文撮影を行った上で、その調査結果やデータを公開すること、そしてその成果を活用した共同研究を行うことをミッションとしています。

館内の地下にある大きな書庫には、重要文化財をふくむ古典籍が約二万二〇〇〇タイトル所蔵されており、さらにマイクロフィルムにして保管している画像のタイトル数は約二十八万点に及びます。

国文研は、日本のあらゆる文学資源を集め、学びたい人には誰にでも開かれた研究機関なのです。ぜひ、閲覧室や展示室、データベースを、気軽に覗いてみてください。

所蔵されている原本の多くはデジタルアーカイブされており、国文研が古典籍の情報や画像を公開している「新日本古典籍総合データベース」(140〜141頁)を利用して、世界中からアクセスすることができ、多くの画像を、一定のルールのもとで自由に使うことができます。また、利用登録をした上で必要な手続きを行えば、館内にある閲覧室で見ることができます。



プロジェクト公式WEBページ <https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/index.html>

## ないじえる芸術共創ラボについて

国文学研究資料館は、専門の研究者だけでなく、だれにでも開かれた機関ですが、当館の資料を利用する人はまだまだ限られています。

そこで、研究者以外の人たちに古典籍に触れてもらい、古典籍の魅力を活かした利用をしてほしい。そのことによって、新しい文化を創り出してゆきたい。

これがないじえる芸術共創ラボの目標です。

2017年10月、文化庁の委託を受けてはじまりました(2019年より日本博の助成事業)。



正式名称:「ないじえる芸術共創ラボ アートと翻訳による日本文学探索イニシアチブ」  
NIJL Arts Initiative: Innovation through the Legacy of Japanese Literature

### ラボを動かす三つの柱

ないじえる芸術共創ラボでは、専門家以外の人に古典籍の資料を活用してもらうために、レジデンス・プログラムを実施しています。レジデンス・プログラムとは、アーティスト等を招聘し、一定期間滞在しながら、創作活動を行ってもらうというものです。

「アーティスト・イン・レジデンス(AIR)」 「トランスレーター・イン・レジデンス(TIR)」の2つのプログラムに加え、研究の世界とアーティスト・翻訳家の活動とを繋ぐ「古典インタプリタ」。これがラボを動かす三つの柱になっています。

ないじえる芸術共創ラボのロゴは、古典籍の森をイメージし、三つの三角形は森の木であると同時に、それぞれAIR、TIR、古典インタプリタを象徴しています。

### ワークショップについて

AIR・TIRと研究者によるワークショップが、ないじえる芸術共創ラボの心臓です。それぞれのAIR・TIRの関心に従って、古典インタプリタが、各ワークショップのコーディネートを行い、さまざまな専門分野の研究者が、館の内外から参加します。

ワークショップでは、研究者から古典籍や研究資料が紹介されることもあれば、古典籍の扱い方を学ぶこともあります。AIR・TIRからの質問に対して、講義が行われることもあります。AIR・TIRの創作の場に研究者も立ち入り、一緒に頭を悩ませることもあります。

AIR・TIRと研究者による協働により、日々、さまざまな化学反応が起こっています。

### Artist In Residence

=AIR

アーティスト・イン・レジデンス

様々な分野で活躍するクリエイターを招聘。古典籍に触れることで得た感性と知識を創作活動に活かしてもらうプログラム。

川上弘美氏(小説家)、長塚圭史氏(劇作家・演出家・俳優)、山村浩二氏(アニメーション作家)、松平莉奈氏(画家)、梁亜旋氏(現代芸術家)

### Translator In Residence

=TIR

トランスレーター・イン・レジデンス

翻訳家を招聘。まだ広く知られていない古典文学作品を他言語に翻訳し、世界に発信してもらうプログラム。

ピーター・小マクミラン氏(翻訳家)

### Classics Interpreter

古典インタプリタ

AIRとTIRが、古典籍の森に分け入り宝物を探すためのナビゲーションをする。専門知識を以て古典文学の魅力伝えるとともに、研究の世界とアーティスト・翻訳家の活動とを繋ぎ、「共創」の場をサポートする。

有澤知世(国文学研究資料館特任助教・博士(文学)、2017年10月-現在)

# ないじえる芸術共創ラボのあゆみ

2019.08

**イベント**「第二回 100人ぐりっ首一英語でとる百人一首一」@立川市柴崎学習館  
ピーター・小・マクミラン・神作研一ほか

**イベント**「山村浩二新作短編アニメーション「ゆめみのえ」完成試写会」  
@渋谷区ユーロライブ

山村浩二・長塚圭史・ロバート キャンベル・木越俊介・有澤知世



2018.12



**イベント**「デジタル発 和書の旅 ひるがえる和歌たち一扇と翻訳で古都に遊ぶ」  
@京都市有斐斎弘道館

ピーター・小・マクミラン・太田達・ロバート キャンベル・小山順子・有澤知世ほか

2018.10

AIR公募を経て  
松平莉奈が  
ラボに参加

2018.07

AIR公募を経て梁巫旋がラボに参加

**イベント**「100人ぐりっ首一英語でとる百人一首一」@立川市柴崎学習館

地元立川の中生たちと、マクミランさんの英訳になる百人一首でカルタ大会を楽しみました。

ピーター・小・マクミラン・神作研一ほか



©えくてびあん

©えくてびあん

2017.10



ないじえる芸術共創ラボ始動・記者発表  
@文化庁

3名のAIRと1名のTIR、そして古典インタプリタが初代メンバーです。随時、各AIR・TIRと研究者によるワークショップを行いました。それぞれの関心に応じて、さまざまな専門家から古典籍の紹介や講義がなされ、徐々にテーマを深めてゆきました～

2019

2018

2017

2019.05

**公開講座**「虚と実 東京藝術大学×国文学研究資料館」@横浜市東京藝術大学馬車道校

山村浩二・木越俊介・有澤知世



2019.02

**関係者向け公開イベント**  
「長塚圭史 新作戯曲試演会」@国文研

ワークショップの成果を短い即興劇に仕立てて上演しました。

長塚圭史・菊池明明・坂本慶介・成河・高木稟・藤間爽子・八十田勇一



2018.11



**イベント**「国際文芸フェスティバルTOKYO 地獄に響く声」  
@国文研

国文学研究資料館特別展示「折りと救いの中世」の連携企画。

伊藤比呂美・東芋・山下晃彦・Knob・ロバート キャンベル・木越俊介・恋田知子・有澤知世

2018.06

**イベント**「デジタル発 和書の旅 山村浩二、蕙斎に逢いにゆく」@国文研

山村浩二・ロバート キャンベル・木越俊介・有澤知世



「デジタル発 和書の旅」は、国文学研究資料館と凸版印刷株式会社が共同で行う出張型イベントのシリーズ名です。

2018.03

**座談会**「『伊勢物語』の魅力語る」@国文研



川上弘美・ピーター・小・マクミラン・山本登朗・藤島綾・黄昱・小山順子

記事▼

[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/kawakami/ise\\_taidan/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/kawakami/ise_taidan/index.html)

**イベント**「デジタル発 和書の旅 湯とアートが鳴子であう」@宮城県大崎市鳴子温泉棧敷湯



山村さん・マクミランさんが、いま関心を持っているテーマにどのように取り組んでいるのかを語りました。また、キャンベル館長と古典インタプリタが、古典籍から、江戸時代の湯治文化や旅文化をひもときました。



山村浩二・ピーター・小・マクミラン・ロバート キャンベル・木越俊介・小山順子・有澤知世

※敬称略、順不同

History

History

2021.02

**対談** ピーター・J・マクミラン×木越俊介  
@国文研

**対談** 山村浩二×ロバートキャンベル  
@国文研

**特別展示**

「ないじえる芸術共創  
ラボ展 時の束を抜く  
古典籍からうまれる  
アートと翻訳」  
@国文研

2020.12



**イベント** 「デジタル発  
和書の旅 未知への旅」  
(動画配信) @国文研

松平莉奈・梁亜旋・木越俊介・  
有澤知世

2020.11

**個展** 「松平莉奈展 うつ  
しのならひ 絵描きとデジタル  
アーカイブ」@京都市  
ロームシアター京都

松平莉奈×古典インタプリタ  
による動画配信「どの先生に  
弟子入りする?」



**動画** ▼  
<https://www.youtube.com/watch?v=G-WhRzjHhg&feature=youtu.be>



2020.08

**イベント** 長塚圭史作・演出  
「KYODEN'S WOMAN」  
朗読上演 @国文研



2019.10



**イベント** 「デジタル発 和書の旅 古典籍×○○  
ラボであう・うみだす・みとおすー」  
@京都市Fab Café Kyoto

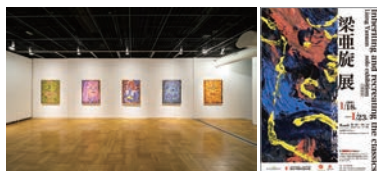
松平さんと梁さんの新作を展示した空間で、研究者とのワークショップでどのようなことを考えているのかについて語り合いました。

松平莉奈・梁亜旋・入口敦志・恋田知子・有澤知世

2021

2021.01

**個展** 「梁亜旋展 Inheriting and  
recreating the classics」  
@東京都



ワークショップや、公開イベントについて詳しく綴った  
「古典インタプリタ日誌」はこちらから  
<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html>

動画コンテンツはこちらから  
[https://www.youtube.com/channel/UComv2mV\\_11JKz9H690ST-7w](https://www.youtube.com/channel/UComv2mV_11JKz9H690ST-7w)

ないじえる芸術共創ラボの活動を日々発信しているSNSは巻末に記載。



History

2020

2020.10



**対談** 川上弘美×  
ロバートキャンベル  
「君が語ったその話は  
君の物語なんだろう?」  
@東京都吉祥寺

2020.9

**対談** 「「古典インタプリタ」  
とは何か?」@国文研

ロバートキャンベル・有澤知世



2017年、2019年の対談も併せて、  
ないじえる芸術共創ラボの  
WEBページよりご覧いただけます。

2020.03

**座談会** 「小説『三度目の恋』完結記念座談会」  
@吉祥寺第一ホテル



川上弘美・山本登朗・小山順子・  
有澤知世

**記事** ▼  
[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/kawakami/sandome\\_taidan/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/kawakami/sandome_taidan/index.html)

**対談** ピーター・J・マクミラン×ロバートキャンベル  
「翻訳をとおして発見した日本文化の魅力  
『扇の草紙』の和歌の見どころ」@国文研



**動画** ▼  
[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/macmillan/og2/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/macmillan/og2/index.html)

History

「愛<sup>かな</sup>しい。」

なつかしい言葉でした。

平安の世で、わたしの姫さんは、女房たちは、

誰かをいとおしく思うときに、

この言葉を口にしたものでした。

小説の主人公「梨子<sup>りこ</sup>」とともに、

現代と江戸時代、そして平安時

代とを歩き来し、共感や違和感

を抱きながら、異なる文化を少

しずつ理解していった川上弘美

が最後に行き着いたのは、「愛と

は何か」というテーマだった。



Kawakami Hiromi

川上弘美

小説家

AIR就任期間 2017年10月~2020年3月

川上弘美 紹介ページ [https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/kawakami/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/kawakami/index.html)



東京都生まれ。1996年『蛇を踏む』で芥川賞、1999年『神様』でBunkamuraドゥマコ文学賞、紫式部文学賞、2000年『溺れる』で伊藤整文学賞、女流文学賞、2001年『センセイの靴』で谷崎潤一郎賞、2007年『真鶴』で芸術選奨文部科学大臣賞、2015年『水声』で読売文学賞、2016年『大きな鳥にさらわれないよう』で泉鏡花文学賞を受賞。2016年『日本文学全集』（池澤夏樹編）において『伊勢物語』を新訳。2019年、紫綬褒章受章。

現代を生きる女性・原田梨子<sup>りこ</sup>が、生涯のパートナーに選んだ生矢<sup>なまや</sup>への愛と苦悩の狭間で、夢を見るようになり、時空の往還を繰り返し、夢に見る江戸時代・平安時代で在原業平の足跡を辿る。

川上11



単行本 川上弘美『三度目の恋』（中央公論新社、2020年9月）

書影は同社提供

『婦人公論』にて連載（2018年1月23日号～2020年2月10日号、全48回）

昔、と言いかけたとたんに、不思議な気持ちになりました。昔。それはいつたどのくらいの以前のことなのでしょう。わたしはもうさほど若くはありません。けれど、年老いてもいい。

昔。それは今のわたしにとっては、たったの数年前をさす言葉でもあれば、わたしが生まれたばかりの四十数年前をさす言葉でもあれば、もつと以前をさす言葉でもあるのです。そう。

昔のある時、わたしは恋をしたのでした。あのひとに。



『三度目の恋』5頁より

それは、今昔愛の物語

当初から、「伊勢物語」をモチーフにした恋愛小説を執筆することは決まっていたのです。しかし、ただ「伊勢物語」の舞台を現代に移しただけでは、自分が書く意味はない、と思ったといいます。

川上さんは、稀代の色好みである主人公、在原業平<sup>ありのなみ</sup>という人間を掴み切れずにいました。意外にも男性同士の友情や、勤め人としての顔が印象的に描かれているものの、魅力の核心が分からない業平。小説の執筆をとおして、その



『三度目の恋』連載完結を  
記念して行った座談会

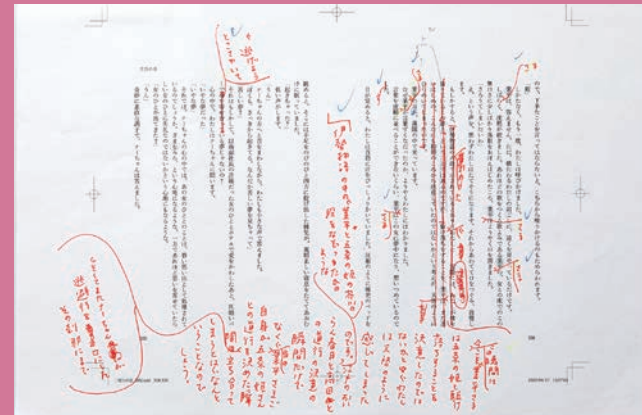


てっしんさいぶんこ  
鉄心斎文庫の  
「伊勢物語」資料を  
眺める川上氏

平安時代の暮らしに  
ついて研究者と  
資料を読み解く



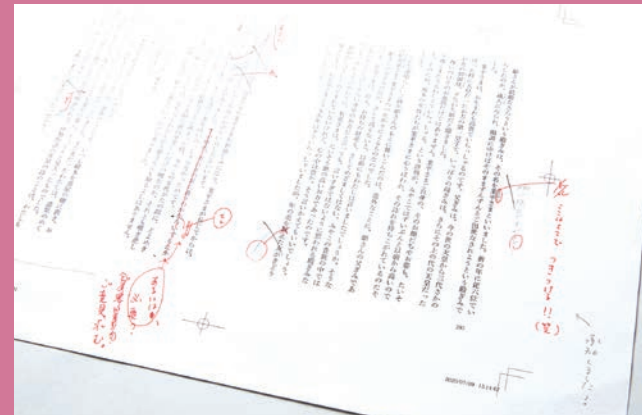
川上 12



川上弘美  
『三度目の恋』  
校正原稿  
(写真上段/初校、  
写真下段/二校)

主人公「梨子」が、「平安と現代の、両方の時間の中に放り出され」、自分ではない女性たちの身体に入る場面は、初校の段階で大幅に加筆がなされ、「伊勢物語」の「芥川」をモチーフに、物語の時間軸をさらにダイナミックに揺り動かした(写真上段)。

「業平」の登場場面で、名前に改めてルビを振ることで彼の存在を印象付けたい、という編集者への指示。川上氏と担当編集者との校正上のやりとりで、作品がさらに磨かれることがわかり興味深い(写真下段)。



川上 13

謎を解き明かしたいと思いましたが。

もうひとつ川上さんの心を挿んだのが、「伊勢物語」が江戸時代を通じてベストセラーであったということ。平安時代よりも後、そして現代よりも前に、多くの人が、絵巻や写本(24〜26頁)だけではなく、注釈書や絵入版本(27頁)を通して「伊勢物語」を楽しんだ痕跡が、遠く思われた平安時代を、現代に少し近づけてくれたのです。

ワークショップで試みたのは、研究者たちに、江戸時代や平安時代の生活・文化・仕事・社会の在り方について、事細かに尋ねることでした。たとえば平安時代に一般的であった、男性が女性の許へ通うという「通い婚」。正妻ではない女性の許を訪ねた次の朝、男性はどちらの家から出勤するのでしょうか？ 妻は嫉妬しないのでしょうか？

細かな問いにひとつひとつ向き合いながら書き上げた『三度目の恋』では、現代を生きる女性・梨子が、夢の中で時代を往還しながら、いにしえの人々の愛の在り方を理解してゆく様が描かれています。

ワークショップを経て

「伊勢物語」の上質なコレクション  
 「鉄心斎文庫」(24〜28頁)に  
てっしんさいかんこ  
 収められる、多様な古典籍と出会  
 い、脈々と愛されてきた「伊勢物  
 語」の享受の豊かさに感銘を受け  
 た川上さん。ワークショップでは、  
 江戸時代や平安時代の社会や文  
 化、暮らしなど、物語と物語の間  
 間ともいえる謎について研究者に  
 尋ね、共に考えることで、『三度目  
 の恋』で梨子が体験する時代や、  
 過去の人々の在り方について理解  
 を深めた。



1



2



3



4



5

『三度目の恋』連載完結記念 座談会の記事  
[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/kawakami/sandome\\_taidan/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/kawakami/sandome_taidan/index.html)



古典インタプリタ日誌(ワークショップ詳細)  
<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#kawakami>



1②研究者と共に、鉄心斎文庫の資料をひらく。 ③執筆をとおして業平の姿を追い求めた。  
 ④平安時代、手紙に使う色紙の組み合わせを学ぶ。 ⑤『三度目の恋』連載終了後、研究者と共にその道のりを振り返った。

川上2



『伊勢物語絵巻』 江戸写 巻子本 1幅

もと5巻～6巻から成ったと思われる絵巻の零本(端本)。巻頭に「伊勢物語第四」の内題を持ち、詞書は第69段冒頭から第85段途中までを備える(以降第87段まで数紙脱落か)。絵は第69段・第71段・第80段・第81段・第82段・第83段・第87段に該当し、第87段を除きそれぞれ対応する詞書の段末に続ける。図様は嵯峨本を参考としつつも、判型に則した改変や脚色を加え、また詞書料紙にも金銀泥の下絵を施す。(岡田貴憲)

川上3



『龍田川業平之図』 江戸中期写 巻子本 1幅

狩野派から分派した鶴澤派の第3代鶴澤探索(1729～1797)が、明和6年(1769)に41歳で法眼(僧位のひとつ)となった後の作。後筆の外題には「楓業平東下り図」とあるが、描かれるのは第106段を題材とした、龍田川に流れる紅葉を眺める業平の像で、タイトルは箱書による。探索は狩野探幽(1602～1674)の門人だった鶴澤探山(1655～1729)の孫にあたり、一説には円山応挙(1733～1795)も探索に師事したと伝わる。(岡田貴憲)

Commentary

川上4



『伊勢物語芥川之圖』

鈴木其一筆  
江戸後期写  
巻子本 1幅

江戸琳派の祖・酒井抱一(1761～1828)を師にもつ絵師・鈴木其一(1796～1858)が、「嗶々其一」と名乗った画風形成期(1829頃～1844頃)に描いた第6段の図。二条后を背負い川縁を駆ける業平の傍らに記された「花の散りつもる芥川をうち渡り」は、第6段に取材した能曲「雲林院」の一節で、観世流分家第6代当主の観世華雪(1884～1959)が昭和15年(1940)に同曲を演じた折、囃子方を務めた当時の所蔵者の依頼で加えたもの。(岡田貴憲)

川上5



『伊勢物語図 遊女讃』

狩野永納筆  
延宝6年(1678)写  
巻子本 1幅

京狩野派第3代の絵師にして、日本初の画人伝『本朝画史』の著作で知られる狩野永納(1631～1697)の、48歳時の作。描かれるのは『古今和歌集』と『伊勢物語』から選ばれた6首の歌意を表した図で、これに京都島原の遊女と思われる「夕霧」「奥州」「かほる」「芳野」「小太夫」の5名が、対応する和歌本文と各々の名を加える。署名の「居翁」と落款の「一陽齋」はともに永納の号で、特に後者は晩年に使われた号とされる。(岡田貴憲)

Commentary

## 『伊勢物語』(絵入版本)

元禄17年(1704)刊  
袋綴半紙本 1冊



京都の書肆・林和泉掾による万治3年(1660)刊本の後印本(年記・住所削除)から、さらに刊記を埋木して改めた後刷り本。林家は幕府の刊行物を手がけた御書物所で、明暦3年(1657)に出雲寺和泉掾の官名を名乗り元禄期からは江戸日本橋にも出店した。万治3年本は判型を小型化した最初の版本で、全49図の挿絵は嵯峨本を模するが、人物の位置や向きに改変が見られ、特に第125段では独自の構図を有する。(岡田貴憲)

## 『伊勢物語』(嵯峨本)

慶長13年(1608)刊  
袋綴大本 1冊  
(上巻欠、現状は覆刻整  
版本を取り合わせる)



京都嵯峨の豪商・角倉素庵(1571~1632)が本阿弥光悦(1558~1637)らの協力の下、豪華な雲母刷り表紙や色替わり料紙を用いて光悦流書風の木活字で印刷した古活字本。嵯峨本は『伊勢物語』版本の先駆けとして後の模範となったが、中でも当該本は第一種本と呼ばれる初刊本に属する。整版による全49図の挿絵は室町期絵本・絵巻の影響下にあり、巻末の刊語には公卿・中院通勝(1556~1610)の署名・花押がある。(岡田貴憲)



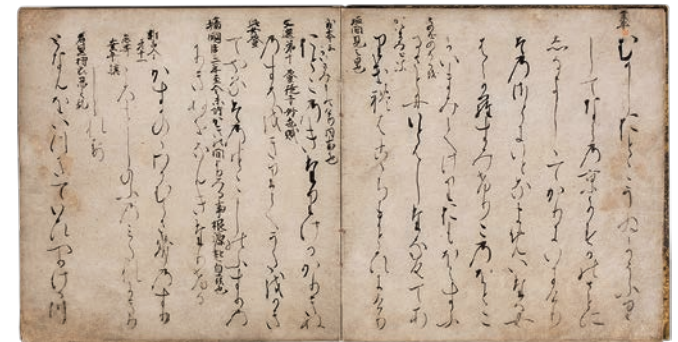
## 『業平図』

なりひらず  
中村芳中・筆  
江戸中後期写  
卷子本 1幅

京都出身で主に大坂で活躍した中村芳中(?~1819)の作。芳中は尾形光琳(1658~1716)に私淑し、享和2年(1802)に『光琳画譜』を刊行したことから琳派の絵師として著名だが、文人画や俳諧からの影響を受けた、流派にとられない独自の画風を特徴とする。第9段を題材とする本作は、濃度の異なる絵具や墨でにじみを作り出す琳派の技法「たらし込み」を用い、かきつばたの咲く川辺に行む業平の姿を親しみ深く描き出す。(岡田貴憲)

## 『伊勢物語』(古写本)

伝二条為氏・筆  
鎌倉中期写  
列帖装柙型本 1冊



現存する最古の『伊勢物語』古写本の一つ。伝筆筆者の二条為氏(1222~1286)は二条家の祖にして藤原定家(1162~1241)の孫にあたり、巻末には定家書写の根本本に由来する奥書(「抑伊勢物語根源…」)を備える。同奥書に続いて「他本」による伊勢と業平の略歴を載せるほか、本文の行間にも定家の加えた勅物(注記)とあわせて他種の注記を記し、初期の享受資料としても貴重。昭和10年(1935)指定の旧重要美術品。(岡田貴憲)



いせものがたりずびょうぶ  
『伊勢物語図屏風』 江戸前期写 屏風 6曲1双

主要章段を含む計45段分の場面について、おおむね前半段を右隻、後半段を左隻に配した絵屏風。各場面は嵯峨本の備える挿絵全49図の範疇に収まり、図様も嵯峨本を模するが、一部に独自の絵柄を盛り込む。つとに斎宮歴史資料館蔵やThe Cleveland Museum of Art蔵の伊勢物語図屏風との作風の近さが指摘され、いずれも宗達派の画風を持たない点で同時代作品から際立つが、中でも本作は嵯峨本に最も忠実である点を特色とする。(岡田貴憲)

小論文

## 『伊勢物語』享受史と鉄心斎文庫

Okada Takanori

岡田 貴憲

国文学研究資料館  
助教

「見るめこそうちふりぬらめ年へにし  
伊勢をの海人の名をや沈めむ」――

『源氏物語』絵合巻に描かれる物語

絵合わせの場で、藤壺中宮は右方の

『正三位』なる流行物語に一定の評価

を与えつつも、古びてもなお衰えない

名声を重んじて左方の『伊勢物語』に

軍配を上げた。平安中期にすでに古

典化していた『伊勢物語』は、作者も

成立事情も不明ながら早くより名作

の誉れ高く、王朝の貴族達を魅了し

てきたとみられる。

当初は在原業平(八二五〜八八〇)の伝説的生涯の  
実記として娯楽的に読まれたであろう『伊勢物語』  
は、やがて歌学の隆盛とともにその性質を変え、和歌  
の教養書として敬意を集めていった。平安末期の歌  
人である藤原清輔(二〇四〜二七七)の『袋草紙』、  
そして藤原定家(二二二〜二四二)の『詠歌大概』  
は、いずれも『伊勢物語』を歌集の列に入れ、実際に  
物語和歌を撰集対象としない勅撰和歌集にも『伊勢  
物語』からは入集している。そうした地位の変化を裏  
付けるように、定家は『伊勢物語』の証本(根拠とす  
べき本)作りに腐心し、当時本文や章段数に様々なバ  
リエーションが生じていた『伊勢物語』の写本を収集  
比較して、いくつもの校訂本を作成した。それらの定  
家本は、全二五段からなる『伊勢物語』の基本形と  
して以後の規範となり、今日でも定家晩年の書写に

考証学に徹する「新注」の時代をもたらされる一方、  
出版文化の開花に伴いかつてない大衆化の道を歩  
む。とりわけ版本の嚆矢である嵯峨本が、室町期の  
絵巻を模範とした挿絵入りで刊行され好評を博し  
たことで、その影響下に多様な整版本が作られ、『伊  
勢物語』は市井の人々に広く受け入れられた。『仁勢  
物語』などのパロディを通して巷間を楽しませると同  
時に、『伊勢物語』は画題の定番ともなり、浮世絵の  
祖といわれる菱川師宣(二六一八〜一六九四)や、琳派  
の大成者である尾形光琳(二六五八〜一七一六)ら今  
日も著名な絵師達が、作中の名場面や業平の姿をこ  
ぞつて筆にとらえ、屏風絵からかるた絵まで大小に描  
き分けた。

時代を超えて触れる者を蠢惑してきた『伊勢物  
語』。当館の所蔵する鉄心齋文庫もまた、その魅力  
に囚われた収集家による稀代のコレクションであ

かかる「天福本」が一般に用いられている。

歌学における尊重とともに、鎌倉期以降には『伊  
勢物語』の学問化も進んだ。『和歌知頭集』を初めと  
する初期の「古注」は、作中人物や出来事の史実への  
比定から始まったが、室町期には「一条兼良(二四〇二  
〜一四八二)が『伊勢物語愚見抄』を著し、そうした  
牽強付会を排し合理的注釈を旨とする「旧注」の  
時代が開かれた。同時代における連歌の発展と相  
俟つて、宗祇(二四二〜一五〇二)や肖柏(一四四三〜  
一五二七)などの連歌師が『伊勢物語』講釈を行い、  
その間書から多くの注釈書が記されたほか、彼らに  
よる古今伝授の流れを汲む三条西実隆(一四五五〜  
一五三七)や細川幽斎(一五三四〜一六一〇)の手で、  
戦国の乱世にも学問の系譜は脈々と受け継がれた。  
やがて江戸期を迎えた『伊勢物語』は、契沖  
(二六四〇〜一七〇二)の『勢語臆断』によって厳密な  
る。株式会社三和テッキの社長を務めた芦澤新二氏  
(二九二四〜一九八九)は、旧制中学時代に「東下り」  
に感銘を受け、また大学で出会った夫人・美佐子氏  
(二九二八〜二〇一九)との結婚に前後して、古書店  
の店頭で由緒ある写本を入手したことで、『伊勢物  
語』の収集に傾倒していった。現存最古級の写本から  
江戸期のかかるに至るまで、夫妻が「子供のようなら  
の」(新二氏の言)と慈しみ、新二氏没後も美佐子氏  
が育み続けたコレクションは、前述の享受史を包み込  
むほど膨大となる。「二人して集めこし伊勢物語一千  
余点の思ひはふかし」(美佐子氏の詠)——夫妻の思  
いを乗せて当館へ寄贈された鉄心齋文庫は、今後も  
『伊勢物語』の不朽の名を伝えていく。

## プロジェクト立ち上げのころ

小林 健二



Profile

小林 健二 Kobayashi Kenji

東京都生まれ。國學院大學大学院修士課程修了。大阪大学より学位（文学）を取得。1980年国文学研究資料館助手。1984年大谷女子大学専任講師、その後、同助教授、教授を経て、2008年に国文学研究資料館教授。2018年同退職、同名誉教授。研究専門領域は日本室町期文芸。主著書『中世劇文学の研究―能と幸若舞曲』（2000年、三弥井書店）、『描かれた能楽―芸能と絵画が織りなす文化史』（2019年、吉川弘文館）。

「ないじえる芸術ラボにしようと思うんですが」。キャンベル館長はプリントされたタイトルを示しながら言われた。「ないじえる」は国文学研究資料館（以下、国文研）の英名の略称となっている。「NIJ」からとったものだが、「ナイジェル」と片仮名ではなく平仮名表記するところが絶妙なセンスだとおそれ入った。日本で生まれ育った平仮名で表記するところが、古典籍資料を現代に新しく開いていこうとするこのプロジェクトに、ピッタリだと思ったのである。

「このプロジェクトは現代の作家と古典文学の研究者が協力して行うので、それに共創という言葉を入れたらどうでしょうか」。これは私の提案。そして「ないじえる芸術共創ラボ」となった。この事業で私が果たしたことはこのくらいである。

国文研が設立してそろそろ半世紀を迎える。文献調査数は約四十万点、マイクロフィルム等による収集資料数も約二十万点におよんでいる。昭和五十五年から五十九年まで

の創設からそれほど経っていない頃に助手としてお世話になり、平成二十年に戻ってきたいわば出戻りの私にとっては、両方とも驚くべき数字であるが、さて、これらの成果をどう活用していくかが次の大問題となってくる。大学共同利用機関としての研究者の利活用はもちろんのこと、膨大な資料を広く社会に役立てていかなばならない。文化庁の委託事業として舞い込んだこの事業は、国文研のリソースを社会に還元していく方法を実験的に執り行う一つの試金石となった。

\* \* \*

「アーティスト・イン・レジデンス」と聞いて、何をやるのかわからなかったが、芸術家・作家に国文研に来てもらい、研究資源を使って創作をしてみようのだと聞いて腑に落ちた。そのガイド役に古典インタプリタという、芸術家と研究者の橋渡し役を置くのもよい考えだと思った。初代のアーティストは、小説作家の川上弘美さん、アニメーション作家の山村浩二さん、劇作家で演出家の長塚圭史さんの三人。

館長の肝煎りで人選しただけあってどなたも素晴らしい。川上さんの柔らかくて必要な知識を吸収しようとするスポンジのような柔軟性、山村さんの目標を定めると一つのこと集中する真摯な姿勢、長塚さんの舞台芸術家に特有な軽妙で洒落な面白さ。どなたも毎回お会いするのが楽しみだった。三人とも芸術家としてはもちろん、人として魅力的であったからである。

\* \* \*

事業が軌道にのってからは、副館長という用務をこなしながら、このプロジェクトに併走してきたので、もどかしいくらい中途半端な付き合いとなり、退官してからはまったくの傍観者となった。国文研を離れてから二年になろうとしているが、この試みがどのように結実したのか。今はそれを見るのが楽しみである。「ないじえる芸術共創ラボ」の「ラボ」は研究室・実験室の意味を持つ。その内容が試されているのである。

Yamamura Koji

## 山村浩二

アニメーション作家

「かつての『夢の格』を  
取り戻したい」。

古代日本において、『夢』とは、  
愛しい人と心通わすことができ  
る世界、異世界と通じることが  
できる世界であり、人と共有で  
きるものだった。

秋成の「夢応の鯉魚」に触れて

夢の世界を旅し、蕙斎の筆をと

おして自然の世界に遊んだ山

村浩二が生んだ幻想世界、「ゆ

めみのえ」とは——。



AIR就任期間 2017年10月~2020年3月

山村浩二 紹介ページ

[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/yamamura/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/yamamura/index.html)



名古屋市生まれ。東京造形大学卒業。ヤマムラアニメーション有限公司代表取締役、東京芸術大学教授、米国アカデミー賞（映画芸術科学アカデミー）会員。代表作『頭山』は、アカデミー賞短編アニメーション部門正式ノミネート、『カフカ 田舎医者』とあわせ、世界5大アニメーションフェスティバルすべてでグランプリを獲得。ほかにも国内外の映画祭で上映、受賞多数。他に『バクシ』『パベルの本』『古事記 日向編』『年をとった鰐』『マイブリッジの糸』など。これまでの活動に対し、川喜多賞、芸術選奨文部科学大臣賞など受賞。「おやおや、おやさい」「ばれーど」など絵本作家としても活躍。2019年、紫綬褒章受章。



山村浩二  
「ゆめみのえ」  
絵コンテ

映像のイメージを具現化するための設計図にあたる。鷹になり空を飛ぶケイサイと、鯉から抜け出したケイサイ。



ポスター

短編アニメーション 山村浩二「ゆめみのえ Dreams Into Drawing」(2019年)

短編アニメーション(10分10秒) 脚本、編集、監督:山村浩二 語り部:長塚圭史 英語語り部、英語翻訳:ロバート キャンベル 音楽:シジジーズ サウンドデザイン:笠松広司 動画:山村浩二、矢野ほなみ デジタルワーク:山村浩二、Sanae

最優秀国際アニメーション短編映画賞(第1回アニメーション祝賀祭、アメリカ、ウィスコンシン、2020.10)、最優秀アニメーション賞(第15回札幌国際短編映画祭、日本、札幌、2020.10)、最優秀短編アニメーション映画賞(1~10分)(第11回ソフィア国際アニメーション映画祭 - ゴールデン・クケリ・ソフィア、ブルガリア、2020.09)等受賞多数。

古典籍の夢をひもとく

日本の古代における夢の表象に関心を抱いていた山村さんは、研究者とのワーク

ショップを重ね、古典籍の中で夢がどのように描かれていたのかを探り始めました。

たとえば和歌の世界で、誰かを夢に見るといことは、相手が自分のことを想っていることを示すのだということ

と、江戸時代の絵画に見られる吹き出しのような線は、現実世界と夢の世界の境界を

ケイサイは日頃から生き物をよく見ている、とても見事な絵を描く絵師だった。ある日鯉を描いていると、眠ってしまう。夢の中で鯉になったケイサイは、楽しく泳いでいたのだが、釣り人に釣られてお城に運ばれてしまう…。



山村浩二  
「ゆめみのえ」  
スチール  
鷹の夢を見る蕙齋と、蕙齋が鷹になり見渡した江戸の風景。



山村浩二「ゆめみのえ」スケッチ  
アニメーションやデザインの概要にあたる。「魚貝譜」と「鳥獣略画式」から。



山村浩二  
「ゆめみのえ」  
絵本

『こどものとも』  
(2021年2月号  
福音館書店)  
アニメーション「ゆめみのえ」と並行して作られた絵本。



30秒間のアニメーションをつくるための原画の束は、約360枚に及ぶ。動きによっては、その倍の分量を描くことも。

田秋成が著した『雨月物語』の一篇「夢心の鯉魚」(42頁)の主人公に見立て、『鳥獣略画式』(二七九七年刊)と『人物略画式』(二七九九年刊)をモチーフにしたアニメーション作品「ゆめみのえ」(36頁)です。  
山村さんの創作は、二〇〇〇年程前に活躍した蕙齋たちや、古典籍に描かれた動物・人物と対話しているかのような営為です。それは夢の中の対話とも似て、私たちに深い精神世界へと誘ってくれるに違いありません。

表しているのだということ：現代とは違う、夢の世界の捉え方について考えを深めてゆきました。  
もうひとつの関心の在処は、江戸時代の絵師・鍛形蕙齋(二七六四〜一八二四)の画業。対象をよく観察し、洗練されたタッチで生き生きと描きだす蕙齋の画力に惹かれ、蕙齋筆の絵手本『略画式』シリーズ(二七七五〜一八二三年刊、(43〜46頁)の模写を続けました。  
そして生まれたのが、蕙齋を、彼と同時代に生きた上を、彼と同時代に生きた上

## ワークショップを経て

約二年をかけて、古典籍に見る夢の表象や、蕙齋の幅広い画業について、専門家と共に理解を深めたり、蕙齋の墓前（東京都中野区）に手を合わせ、生前の蕙齋について思いを巡らせたりした山村さん。アトリエにて何度も調整を重ねたアニメーションに、音声や音楽が重なり、短編アニメーション「ゆめみのえ」が完成。二〇一九年八月二十三日、東京都渋谷区ユーロライブにて、「山村浩二新作短編アニメーション「ゆめみのえ」完成披露試写会」を行った。



短編アニメーション「ゆめみのえ」予告編 動画  
日本語版

<https://vimeo.com/ondemand/yumeminoe>

英語版

<https://vimeo.com/ondemand/dreamsintodrawing>

完成披露試写会の動画

<https://www.youtube.com/watch?v=FAFE3LMv2AA&feature=youtu.be>

古典インタプリタ日誌（ワークショップ詳細）

<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#yamamura>



①「ゆめみのえ」完成披露試写会の様子。 ②江戸時代に出版された絵本やその板木を観察。  
③蕙齋の墓前に手を合わせる。 ④アトリエにて、「略面式」シリーズとほぼ同じ大きさで原画を描いたという。

山村 11



ちようじゅうりやくがしき  
『鳥獣略画式』

鍛形蕙斎画  
寛政9年(1797)刊  
大本 1冊

寛政7年刊『略画式』にはじまる、蕙斎の略画シリーズの一つ。犬、猫、牛、とんぼなど身近な生き物から、虎、象、鯨、はては龍、獅子に至るまで多くの鳥獣虫魚を描く。色刷りで複数のアングルから描かれている点に特色があり、ユーモラスなポーズも含まれる。形は略されながらも、たしかな筆遣いが生き物たちの動きを鋭く捉え、躍動感を生み出している。(木越俊介)

山村 16



『人物略画式』

鍛形蕙斎画  
寛政11年(1799)刊  
大本 1冊

和漢の故事や源氏物語五十四帖をはじめ、雅俗にわたる人々の姿をにぎやかに描く。既成の画題に基づく絵は略画により新たな魅力が提示される一方、市井に材を得たと思われるスケッチのような絵は、人物同士が語り合い絡み合うなど興味が尽きない。さらに、群衆図とも呼べる一群の絵も楽しい。一書を通して、音が聞こえてくるような独特の世界が展開する。(木越俊介)

山村 9

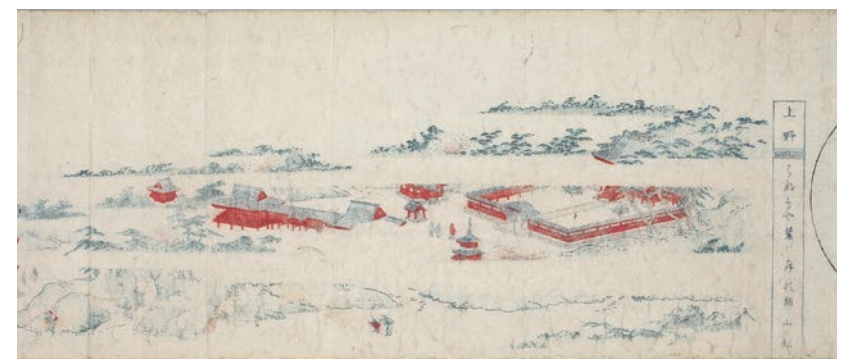


うげつものがたり  
『雨月物語』

うたのききなり かたもりのぶ  
上田秋成作・桂宗信画  
安永5年(1776)刊  
半紙本 5巻5冊

九つのお話を収める短編奇談集。内容、語彙などにおいて、中国の白話小説や日本の古典作品などからの影響が色濃い。怪異的、幻想的な話が多く、たとえば「夢心むこころの鯉魚りぎよ」は、平安時代の僧こうぎ興義が熱病にうかされ、夢で鯉となるが、そこで目にした光景や釣られそうになるところまでことごとく現実と符合するという話。中国の話の原拠としつつ、画に秀でた実在の僧を主人公に据えるなど、独自の工夫が施されている。(木越俊介)

山村 10



えどめいしよずえ  
『江都名所図会』

鍛形蕙斎画 天明5年(1785)刊 1巻

蕙斎の画業の中でもごく早い時期の作。江戸府下の五十の名所を発句とともに掲出する。藍が多く用いられ、ところどころに入る朱とのコントラストが鮮やかである。上野、両国橋、日本橋、隅田川などは他の名所に比して大きくとりあげられている。上部に空白があるのは、詩歌が書き入れられることを想定されたものか。蕙斎には後年、「江戸一目図屏風」えどひとめずりょうぶ「隅田川図屏風」などの逸品がある。(木越俊介)

山村 17



山村 18



山村 19



### 『魚貝譜』板木

(実践女子大学蔵)

『魚貝譜』は享和2年(1802)に絵入俳書『竜の宮津子』として須原屋市兵衛から刊行された。その後、末尾の発句を削除して『魚貝譜』と改題し、さらに本文中の発句を全て削除して『魚貝譜』の名で刊行した改竄本がある。その後『魚貝略画式』と改題し、一連の「略画式」ものとして販売しようとした。文化10年(1813)6月に大坂の福定藤兵衛に板木が渡った。福定藤兵衛の名を削った後摺本もある。板木は各地に分蔵され、改竄の後を辿ることができる。ユゲット・ベレス旧蔵。(佐藤悟)

山村 12



### ぎょかいふ 『魚貝譜』

鍛形蕙斎画  
享和2年(1802)以降刊  
大本 1冊

享和2年刊『竜の宮津子』にあった発句の作者名や発句のみで絵のない末尾の丁が省かれ、絵本としての性格を強めた改題本。さらに発句全てが削去された後、『魚貝略画式』と改題される。宝暦12年(1762)刊『海の幸』(勝間竜水画)の流れを汲み彩色摺の絵入俳書の系譜に位置づけられ、魚貝類を色刷りで大きく美しく描く。(木越俊介)

山村 13



### 『魚貝譜』板木

『魚貝譜』の板木。厳密に言えば、当初『竜の宮津子』として彫られた板木が、数度の改題を経、上部の発句などが削られたもの。実践女子大学図書館蔵の板木群とツレの関係にあたる。板面は印刷面と反転する。なお、『魚貝譜』のような袋綴の製本は、紙の片面のみに印刷し、その印刷面を二つ折りにしたものを一丁として、折り目と反対側を袋状に綴じていく(66頁【長塚27】参照)。写真の板木は、本来二丁分にあたる2枚の板木それぞれの中央を裁断した断片のうち、【山村12】の見開き図と対応させた一組として伝わったものである。(木越俊介)



## 『人物略画式』板木

(実践女子大学蔵)

『人物略画式』は寛政11年(1799)10月に須原屋市兵衛から刊行された多色摺絵本。享保6年(1721)刊林守篤『画筌』など先行する狩野派の人物絵本の影響を強く受け、自ら描いた寛政6年刊『諸職絵鏡』や寛政7年刊『略画式』と重複する人物も描かれる。精巧な異版がある。板木は明治期にフランスに渡り、フランスでも試し摺がおこなわれた。ユゲット・ベレス旧蔵。板木は他にメトロポリタン美術館などに分蔵される。(佐藤悟)

小論文

## 夢を描く——古典における夢について——

Iriguchi Atsushi

## 入口 敦志

国文学研究資料館  
教授

皆さんは、夢を描けと言われたらどのような絵を描きますか。

以前、大学での講義の折、学生たちにそういう課題を出して、リアクションペーパーに描いてもらったことがある。得られた回答は大きく分けて三パターン。最も多かったのは、小さな○がいくつか連なって、その先に大きな○があるバブル型の吹き出しの中に夢を描くもの。次は輪郭が雲か煙のようにもこもこした吹き出しの中に描いたものだった。後者を雲煙型と呼びたい。雲煙型が次点と言っても、

パブル型とほとんど同じくらいの数である。どちらも、マンガで多用されるが、夢だけではなく、空想していることなど、その人物の頭の中にだけあって他人には見えないことがらを描く時に使われている。一番少なかったのは、全く枠なしに夢の内容を描くもので、六十枚ほどの回答の中に、二枚か四枚あっただろう。枠がないので、これを無枠型としておこう。

少ないながらも無枠型があることに、すこし驚いた。古代から中世、室町時代の末まで、この無枠型が夢の描き方だったのだが、江戸時代に入って吹き出し型に転換し、現代に至っている。無枠型を描いた学生がどのように認識していたかはわからないが、絶えてしまったと考えていた古代の痕跡が残っていたことに驚いたわけである。

では、夢の描き方の変遷について、時代を追って見よう。

夢の描き方を見るための格好の題材がある。それ

とされる「新刊全相平話」五種である。「新刊全相平話」とは『新刊全相平話武王伐紂書』など挿絵入りの小説五種の総称で、五種の内四種に吹き出し型の夢が描かれる。以後、中国の挿絵入りの版本では、この吹き出し型の夢が多用されるようになる。そして、夢を吹き出し型に描くことの普及に伴って、もともと無枠型であった託胎の場面も吹き出しが付されるように変化する。明代、成化二十二年（一四八六）に刊行された『釈氏源流』中の託胎図は吹き出し型であり、これらが日本にもたらされ、早い例では『釈迦堂縁起』（一五二五年頃）の吹き出し型の託胎図に影響を与えたとされている。

興味深いのは、その吹き出しの描き方が中国と日本とで異なっていることである。中国では実線の曲線一本で夢と現実とをはっきり区別しているが、日本では、実線ではなく雲か霞のようなものの上に夢の内容が乗っているように描かれており、夢と現実との境界が曖昧なものになっている。雲煙型という独自の表

は、釈迦八相の二つ「託胎」の場面である。釈迦の生母である摩耶夫人が、白象が右脇から胎内に入る夢を見て、釈迦を身ごもったというエピソードで、古代から図像化されてきた。二〜三世紀のガンダーラの石彫、五世紀北魏の石仏の線刻、敦煌で発見された唐代の仏伝幡（仏前を飾るための旗）などに仏伝図があり、仏教の伝来に伴って、「託胎」の図像もインドから中国へと伝わって来たことがわかる。それらの夢の図像は、すべて無枠型である。日本にも鎌倉時代以降の仏伝図が多く残されているが、基本は無枠型であった。「託胎」を離れてみても、鎌倉時代末期、十四世紀前半の『石山寺縁起』中に夢の場面があるが、これも無枠型で描かれる。古代において、現実と夢との境界が描かれていないことは大変興味深いことと思われる。

では、いつから夢と現実を隔てるような描き方がなされるようになったのか。私が確認しうる最も古い例は、中国元の至治年間（一三二一〜一三二二）に刊行された現に変えていると言ってもよいだろう。

前述したように、江戸時代に入って徐々に吹き出し型の夢が定着していく。黄表紙『金々先生栄花夢』（96頁）、主人公が栗餅屋の店先で夢見ている図をよく観察してみたい。曲線の吹き出し型で描かれているが、その線は、一本ではなく、何本かの線でなぞられていることがわかるだろう。これも雲か煙のように、つまり雲煙型に見えるのだ。このような例は他にも多く見ることができる。

中国から来た吹き出し型の夢の描き方を模倣しながらも、日本人はどこか違和を感じ、夢と現実とをはっきり区別しないような、雲煙型の吹き出しにしたのではないだろうか。その描き方が、現代の雲煙型、さらには先祖返りしたかのような無枠型に現れていると考えるのである。

# 古典籍を未来へつなぐ小さな一步

束芋



## Profile

束芋 Tabaimo

現代美術家。1999年に京都造形芸術大学卒業制作としてアニメーションを用いたインスタレーション作品「にっぽんの台所」を発表しキリン・コンテンツ・アワード最優秀作品賞受賞。以後2001年第1回横浜トリエンナーレを皮切りに、2011年には第54回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館代表作家に選出される等、数々の国際展に出品。近年は舞台でのコラボレーションも展開。2016年はシアトル美術館にて「写し」をテーマに大規模個展を開催。2017年1月から2018年5月まで、朝日新聞朝刊連載小説「国宝」(吉田修一著)の挿絵を担当。2019年銀座のポーラミュージアムアネックスでの個展では初の油絵を発表。束芋が構成・演出を手がけたパフォーマンス作品・映像芝居「錆からでた実」のアメリカツアーが2020年2月～3月に開催。現在、フランスのサーカスパフォーマンスとのパフォーマンス作品を制作中。

私は日本に生まれ、「写し」を得意とする陶芸家の母を持ち、芸術系の大学を卒業しながらも、古典籍と言われるものにはほとんど興味を示してこなかった。大学の卒業制作に取り組む上で使わせてもらった、北斎版画の色は、その後二十年間ずっとお世話になっているが、北斎版画の背景にあるストーリーなどは切り捨て、表面的なデザインや色を拝借するに留まった。しかし、二十年もの間、拝借するだけを繰り返して、離れることが出来なかったということが結果論だとしても、そこには何らかの理由が見えてくる。私は母と同様、「写し」ということに魅了されてきたのかもしれないと思に至った。

ここで使わせてもらう「写し」の意味としては、単純な「コピー」を意味していない。「写し」に人生をかけて向き合う母を見てきた私がこの言葉の中に見出したのは、連綿とつながっていくことを志向する精神である。「一人の人間が生きられる長さは限られ、その中で実現し得ることも限られる中、作ることで時空を超えたつながりが持てた場合、一人では実

現し得なかったことが可能になる。

それが「写し」をした現代の作家に与えられる利益というだけではなく、先人にとっても利益となると感じられる作品となった時、初めて価値ある「写し」となるのだと思う。作品は先人につながることで力を得、同時に先人が生み出した功績のその先に存在する作品によって、先人が想像し得なかつたような更なる未来へつながる可能性を持ち始めるだろう。そういった意味で、単純な「コピー」の膨大な積み重ねが、私にとっては価値ある「写し」への第一歩になったと信じている。

国文学研究資料館での特別展「祈りと救いの中世」で『熊野観心十界曼荼羅』を見た時、「描くことにより自分のものにした」という欲求が芽生えた。目で見て記憶する時、そこには必ず編集という行為を伴う。まずはトレースすることとで編集をせずに「見る」ことをさせてもらった。その際には「熊野観心十界曼荼羅」の高精細画像を提供してもらった。

国文学研究資料館のホームページには、この「熊野観心十界

曼荼羅」の画像は含まれないものの、こういった貴重な画像データが一般に公開されている。手に入る情報と、技術を要しないトレースという方法を用いた。実際にやってみると、無編集で「見る」ことで、描かれている人々の表情を一人一人追うことができ、それぞれの感情まで感じられたり、時間をかけてラインをたどる作業を通して自分の中で新しい時間軸が生まれたりと、私に多くのものを与えてくれることを実感した。

何よりも、自分の線で描いた「熊野観心十界曼荼羅」が手元に残る。このことで、先人が想像し得ない未来への可能性が私の手の中にある、という感覚が高揚する。

Nagatsuka Keishi

## 長塚圭史

劇作家・演出家・俳優

黄表紙と演劇は如何にして  
出会うことができるのか。

「この建物に来て、私が直感した  
古典籍と演劇を繋げられる可能  
性が大きく一つあった。時を越えて  
今もここに現存している、多くの  
人の手に取られ、読まれた、古典  
籍そのものだ。この時間と、手垢  
と、記憶と、思考と、時代とが詰  
まったこの一冊の古典籍。」

——長い実験を経て、長塚圭史と  
黄表紙が織りなす幻想世界が、国  
文学研究資料館の閲覧室に立ち  
上がる。

AIR就任期間 2017年10月~2021年3月

東京都出身。1996年「阿佐ヶ谷スパイダース」を結成、作・演出・出演の三役を担う。2017年より劇団化。2004年、芸術選奨文部科学大臣新人賞、2006年、読売演劇大賞優秀演出家賞を受賞。2008年、文化庁新進芸術家海外研修制度にて1年間ロンドンに留学。帰国後の2011年、ソロプロジェクト「葛河思潮社」を始動。また17年に新ユニット「新ロイヤル大衆舎」を結成。近年の主な作品に「セールスマンの死」「イヌビト〜犬人〜」「常陸坊海尊」「桜姫〜燃焦旋律隊殺於焼跡〜」「イーハトーボの劇列車」「ハンクマン」など。出演作に「シンウルトラマン」「海辺の映画館-キネマの玉手箱-」。TFM「yes!〜明日への便り」(ナレーター)など積極的に活動。2021年より神奈川芸術劇場芸術監督に就任。

長塚圭史 紹介ページ →  
[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/nagatsuka/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/nagatsuka/index.html)





国文学研究資料館の研究者であるアリモトトモコは同館閲覧室へと飛び込んだ。敬愛する戯作者山東京伝の幻の黄表紙作品の草稿を、かつての同僚であり恋人でもあったアダチから、ある契約の元に入れて入れたからだ。草稿には偽りなく未知なる京伝の世界が広がっていた。

他の閲覧者がいるにも関わらず感動のあまり問絶するトモコ。契約を遂行するまではまだ譲渡するつもりも読ませるつもりもなかったアダチが閲覧室に逃げ込んだトモコを追ってくる。押し問答する二人。

そこへ作業着姿の中年男が小さな扉から躍り出て、トモコの手から草稿を奪い取るや否や、書棚の奥へと消えていく。トモコは今の中年男こそ山東京伝ではないかと後を追う。アダチもトモコを追いかける。そして閲覧者たちは然るべき静けさ求めてトモコとアダチを追いかける。

果たして閲覧室の時間はねじ曲がり、過去と現在のは混濁し、山東京伝の世界が濃密な読書空間と戯れ始める。

ものがたり



長塚3

2020年  
2月29日(土)  
2回公演  
15時開演 (16時開演)  
16時開演 (16時開演)  
お申し込みは2回公演のいずれかからさせていただきます。  
お申し込み後、両公演とも開演は開演前となりますのでご了承ください。  
16時公演の後、国文学研究資料館大会議室にてアフタートークあり。

江戸時代の絆を纏めた山東京伝と  
彼に惹かれる戒る現代の女の幻想劇場

# KYODEN'S WOMAN

～アナクロニズムの夢～

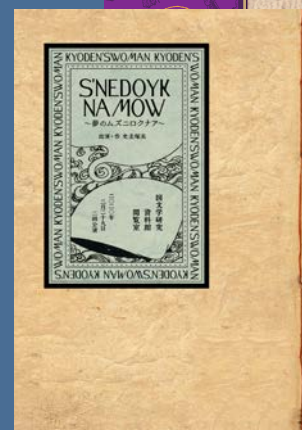
作・演出 長塚圭史

舞台監督 川口真人 | 空間・衣装 長峰麻貴 | 音響 國府田典明  
出演 大鶴美仁音・岡部たかし・坂本慶介・高木真・土屋佑香・引間文佳・李千鶴

お申し込み先 <https://entry-service.jp/nij/nshonhaku>  
お問い合わせ [nij\\_larts\\_initiative@nij.ac.jp](mailto:nij_larts_initiative@nij.ac.jp)

主催 国文学研究資料館

長塚5



パンフレット  
黄表紙をモチーフにしたパンフレット、ポスターやパンフレットのデザインには、山東京伝作のデザインブック『小紋雑話』(65頁)等がモチーフとして使われた。

演劇 長塚圭史・演出「KYODEN'S WOMAN ~アナクロニズムの夢~」(2020年)

### 黄表紙と戯れる幻想世界

「今、目の前にある古典籍は、どのような人々によって作られ、そして売られ、あるいは贈られ、あるいは拾われて、ここまでやって来たのだろうか。」

長塚さんの関心は、いつもそこにありました。古典籍が内包する時間を深く探るために選んだのは、多くの人々が制作に関わった「版本」、つまり、板木が彫られ、刷られ、製本され、売られた書物でした。

数人の俳優陣と研究者と共に、行ったワークショップでは、

2020年2月29日、国文学研究資料館の閲覧室を演劇空間に見立て、役者と観客が歩き回りながら展開する形式での上演を予定していたが、COVID-19の感染拡大を考慮して延期。同年8月30日に、朗読劇の形で上演された。

出演 大鶴美仁音・岡部たかし・坂本慶介・高木真・土屋佑香・引間文佳・李千鶴／三味線演奏 柳家小春／空間・衣装 長峰麻貴／音響 國府田典明／舞台製作 唐崎修／舞台監督 川口真人／映像作成 松澤延拓／記録撮影 エヴァシユウ



「KYODEN'S WOMAN  
～アナクロニズムの夢～」  
朗読公演上演風景

朗読公演の様子。本人役の岡部たかしが、戯曲のト書きを朗読しながら、当初想定されていた上演方法をも観客に想像させた。冒頭に登場する「古典籍をめくる」動作は、ワークショップで何度も検討された身体性を活かし、薄い紙を書物に見立てて行われている。朗読バージョンでは新たに三味線演奏と歌も加わった。

岡部 「ちなみにこれは何を読んでるんですか？」

閲覧者 「黄表紙です」

岡部 「はっ！」

閲覧者 「黄表紙です」

岡部 「何拍子？」

閲覧者 「黄表紙です」

岡部 「え？だから何拍子？はい僕はこの何拍子って聞き返すのはですね、正直どうかと、長塚さんにも一応相談はしたんですけども、ちょっと試しに言ってみる。ことにしたんですね。どうですか黄表紙って言われて、え？何拍子？っていう問答は」



「KYODEN'S WOMAN  
～アナクロニズムの夢～」  
舞台空間写真(2020年8月)

閲覧室を4つの空間に分け、第一場～四場の舞台とする当初の計画はそのままに、朗読劇用にブラッシュアップした舞台美術。京伝の黄表紙やデザインブック(62～65頁)に登場するモチーフが、書棚や壁にちりばめられ、京伝の作品世界と現実が交錯する様を表す。閲覧室には、撮影した古典籍の写真のマイクロフィルムを投影して閲覧する機械が備わるが、そのスペースにて、国文学研究資料館の存在意義についての問答が繰り広げられる予定だった(公演時は着座のまま上演)。

百合 「いらしてましたか？」  
京伝 「うん。なんや知らんけど小さい扉からこつち出て来たわ。せやけどどこにゲッターやなあ。嫌いやわあ。雰囲気。ものつすごい寂しい。閲覧やて。ポクの本読むとこちやうでこ」  
百合 「でもここでああして大事にしててくれているんでしょう」

黄表紙が職人たちによって作られ、売られるまでの工程を描いた黄表紙を手がかりに、一冊の書物が作られる過程を身体で表現し、理解を深めてゆきました。

「黄表紙」とは、江戸時代中～後期にかけての三十年間、江戸の知識人たちにより作られた、滑稽な絵入読み物です。作中にしばしば登場して、内情を明かしたり創作人物と交わったりする黄表紙の「作者」の在り方に関心を抱いた長塚さんは、江戸を代表する戯作者・山東京伝(一七六一～

一八一六)に注目しました。

京伝の黄表紙を身体化したり、書物を読むという行為に迫ったり……いくつもの実験を経て、黄表紙という存在そのものを理解しながら、最終的にたどり着いたのは、古典籍を偏愛する研究者への好奇心。架空の黄表紙研究者との、現実と虚構が入り混じる長い問答のさ中、閲覧室の地下書庫から、古典籍が内に秘める「時間」や「物語」と共に山東京伝が姿を現し、「おおむね黄表紙」たる幻想世界が立ち上がったのでした。

## ワークショップを経て

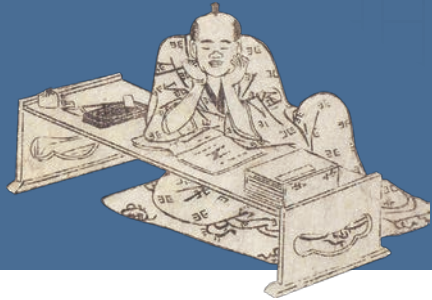
数人の俳優たちと研究者とで、本をひらく身体性、そして黄表紙という存在に対して、古典籍のテクストや絵を手掛りに、さまざまな方向からアプローチを試みた。

二〇一九年二月のワークショップで行った、架空の黄表紙研究者に対して、でたらめまじりのインタビューを行うという即興劇は、「KYODEN'S WOMAN」の構想に至る大きなきっかけとなった。

ワークショップ参加者  
菊池明・坂本慶介・菅原永二・成河・高木稟・引間文佳・藤間爽子・八十田勇一・李千鶴（敬称略）



①古典籍の下隅に付着している過去の手垢に注目し、古典籍をひらく身体性を追求することに。②京伝の黄表紙「心学早染判」に登場する悪魂踊りに挑戦。③京伝の黄表紙「江戸生艶氣樺焼」を素材にした習作戯曲「江戸生艶氣樺焼」を演じる。④黄表紙を作る職人の動きを身体的に表現した。



「KYODEN'S WOMAN」公演映像  
<https://youtu.be/5WXIzMPRVE8>



「KYODEN'S WOMAN」ドキュメンタリー映像  
[https://youtu.be/72GQ\\_TygED4](https://youtu.be/72GQ_TygED4)



長塚氏による習作戯曲「江戸生艶氣樺焼」  
[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/nagatsuka\\_pilot\\_kabayaki.pdf](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/nagatsuka_pilot_kabayaki.pdf)



古典インタプリタ日誌（ワークショップ詳細）  
<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#nagatsuka>



長塚 12



たなくひあはせ  
『手拭合』

山東京伝編・画  
天明4年(1784)刊  
中本 1冊

『たなくひ』は手拭いのことで、新案のデザイン79種を彩色刷りで掲載。歌合など宮廷風伝統行事のパロディとして行われた催しの図録化というスタイルをとる。大名の子弟や吉原の遊女といった多様な身分の人物が、デザインの出品者として名を連ねており、若い京伝の交遊圏がうかがえる。図版中央のデザインは、舞台の幕の隙間から客席を覗く滑稽な顔。この特徴的な鼻は、京伝が後に戯作中で用いたことから、後年「京伝鼻」と称された。(有澤知世)

長塚 13



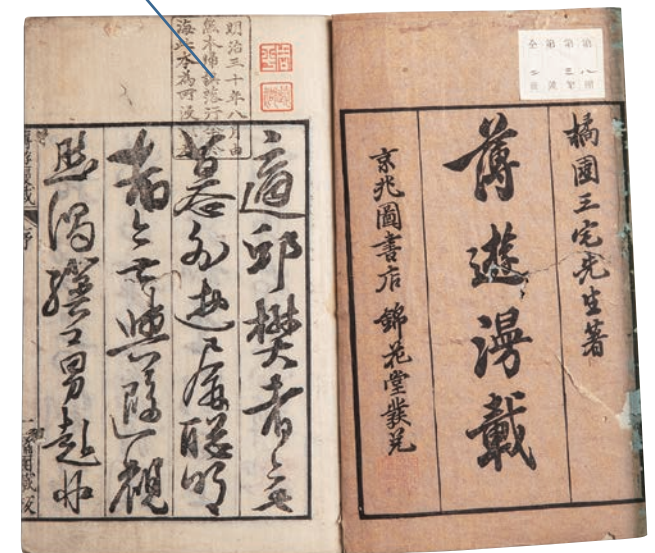
きんきんせんせいぞうかのゆめ  
『金々先生造化夢』

山東京伝作・北尾重政画  
寛政6年(1794)刊  
中本 3巻1冊

『金々先生栄花夢』(96頁)の後日談。金々先生が茶漬飯を食おうと煮花をしかけたまま眠り、夢中で出会った仙人に、一杯の茶漬けができるまでのあらゆる働きを見せられる。『金々先生栄花夢』が洒落本的な世界を描くのに対し、教訓的な作風の本作は、寛政の改革以降の戯作界の動向を映し出す。狂言回しの「金々先生」は、『手拭合』(61頁)以後、戯作をとおして戯作者・京伝のイメージが定着した「京伝鼻」で描かれ、作者像を重ねて読むよう読者に促す。(有澤知世)



長塚 11



はくゆうまんさい  
『薄遊漫載』

三宅橘園著  
文化11年(1814)刊  
中本 2冊

朝鮮通信使と会うための旅の漢文体紀行文。著者が各地で文人と交遊した様子や、多数の漢詩を収める。文化8年2月27日に京を出発、姫路や岡山を經由し、5月1日に対馬着、朝鮮通信使たちと交友する。長崎へも足を延ばし、7月29日に帰着。本書には、旧蔵者・内田遠湖(明治~昭和前期の中国哲学者)によると思われる印「明治三十年八月由熊本帰誤落行李於海此本為所浸湿者」が捺されており、彼が本書を海へ落として浸みを作ってしまったことを伝える。(有澤知世)



いなずまびょうし こうへん  
『稲妻表紙後編』  
ほんちようすい ぼだいぜんてん  
本朝醉菩提全伝』  
山東京伝作・歌川豊国画  
文化6年(1809)刊  
半紙本 6巻6冊



一休禅師の伝記を大枠とし、『通俗醉菩提全伝』など、多様な先行文献に拠りながら、泉州堺高須の名妓「地獄」などの人物が絡む複数の挿話から構成する読本。装丁や口絵にも工夫が見られ、例えば「臭皮袋図」は、美人画をめくると下から髑髏図が現れる仕掛けで、「どのような人間も、骸骨(=死)を抱えて生きている」という一休の教えを印象的に示す。この髑髏図は『解体新書』の図に拠ることが指摘されている(『月岑稿本増補浮世絵類考』)。(有澤知世)



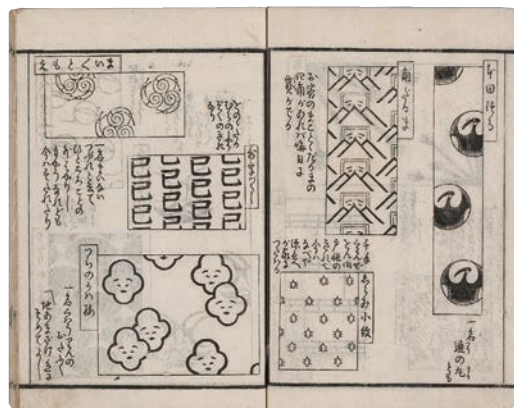
あくだまこうへん  
『悪魂後編』  
にんげんいつしうむなざんよう  
人間一生胸算用』  
山東京伝作・画  
寛政3年(1791)刊  
中本 1冊

人間の腹の中には一国があり、心と気がそれを治める。無名屋無次郎は、「心」正しく真面目な男だったが、「気」が謀反を起こして「心」を追い出し、「目」や「口」や「耳」と共に吉原等で好き放題、無次郎の立場を危くする。隣人の京伝は縮んで無次郎の体内に入り、迷子の「心」を見つけて元へ戻す。「心ここにあらず」「気がそれる」などの慣用句を擬人化して洒落る手際が見どころ。作者京伝が狂言回しとして草双紙の慣習などについて述べる点も興味深い。(有澤知世)



てんどうだいふくちよう  
『天道大福帳』  
ほうせいどう きんしんじ  
朋誠堂喜三二作・  
きたあまよし  
北尾政美画  
天明6年(1786)刊  
中本 3巻3冊

人間の善行が金銀となって天上へ上がり、悪行は火や焼味噌となってその金銀を減らす。勧善のため、天道のぬか星が人間を熊手で操作した結果、「仮名手本忠臣蔵」のドラマが生まれたというこじつけ。天道が人間を操るという趣向は、その後の黄表紙に影響を与えた。各巻絵題簽(絵と書名を印刷し、表紙に貼付けた小紙)を残す本書は、黄表紙らしい書物のスタイルを伝える。挿絵担当の政美は、後に『略画式』シリーズ(43~45頁)などを描く鋳形蕪斎。(有澤知世)



こもんがわ  
『小紋雅話』

山東京伝作・画  
寛政2年(1790)刊  
小本 1冊

小紋図案集の形をとり、京伝案じの滑稽なデザインを集めた見立て絵本。見立てとは、異なるものを連想で結びつけること。たとえば「丸に鶴」のようなデザイン(図版右)は当時江戸屈指の地本問屋・鶴屋喜右衛門の商標を思わせるが、「本田つる」「一名通の丸とも」という書入れを読むと、本田髻(細い髻を高く結う、通人が好んだ髪型)を上から見た図であると気づき、その瞬間に笑いが生じる。浮世絵師北尾政演の顔も持つ戯作者京伝の魅力を堪能できる作品。(有澤知世)



きみょうずい  
『奇妙図彙』

山東京伝作・画  
享和3年(1803)刊  
小本 1冊

全丁文字絵を主とした見立て絵本。「人丸」や「ヘママシヨ入道」など、昔ながらの文字絵を示した上で、「新法」として自身の新案を掲載、詞書で見立ての意を示す。図版は「おいらん」の文字を花魁の姿に見立てた箇所。配列の方針の読み解きが眼目であり、また困難な点であるが、たとえば「おいらん」の次は若い遊女である「新造」と、遊女に仕える少女の「禿」、さらに少女の遊具である「籬」と続き、連想で世界観が展開する。(有澤知世)



きんせい きせきこう  
『近世奇跡考』

山東京伝著・喜多武清画  
文化元年(1804)刊  
大本 5巻5冊

いにしへの文物、芸能などについて、文献や古画を用いて考証した随筆。寛政の改革の際、洒落本三作を執筆した咎で処罰された京伝は、知識人の間で流行した尚古趣味の機運に乗り、後半生の情熱を考証活動に注いだ。彼の関心は、当時の正史には記され難い近世初期の市井の風俗や芸能にあり、浮世草子や古画等を活用して考証を行う点に特徴がある。また、引用資料の提供者が明記されていることから、その成果は彼の周辺の知識人らとの協力関係に支えられていることが知られる。(有澤知世)



こつとうしゅう  
『骨董集』

山東京伝著・喜多武清/歌川豊広等画  
上・中巻 文化11年(1814)刊、  
下巻 同12年刊  
大本 3巻4冊

『近世奇跡考』に次ぐ考証随筆で、近世初期のみならず、中世の文物・風俗についても考証を加える。文化10年の冬に本書上・中巻の稿を完成させた京伝は、この年より戯作作品の序文に「骨董集の著述のいとま」などと記し、考証に情熱の多くを傾けていたことを示す一方で、その成果を合巻や読本といった戯作での知的遊戯の材としている。文化13年に京伝が急逝する直前まで書き続けられ、「骨董集と討ち死にした」と曲亭馬琴に称された。(有澤知世)



しんべんきんべいばい  
『新編金瓶梅』

おいていばきんべい くにやす くにまろ  
曲亭馬琴作・歌川国安・国貞画  
天保2年(1831)～弘化4年(1847)刊  
中本 10冊80巻

中国明代の小説『金瓶梅』を、『水滸伝』などに抛りつつ、舞台を室町時代の日本に移した合巻。合巻とは、黄表紙が敵討物の作風に傾き長編化した後に登場した草双紙の最終形態で、美しい装丁や、推理小説的性格を獲得してゆく。草双紙は、絵と文が一体となった文芸であるが、長編化するにつれ情報量が増え、空白を埋め尽くすほどの緻密な印刷に、当時の技術の高さがしのばれる。展示箇所右側のページが、板木の左面に相当する。(有澤知世)



しんべんきんべいばい  
『新編金瓶梅』板木

(第一篇 8丁表・8丁裏に相当)

合巻『新編金瓶梅』の板木。版面が、後世盆の背として生かされている。木版印刷で作られる草双紙は、草稿・版下が出来た後、彫師が板木を彫り、摺師が摺り、丁合(ページを揃える)し、針と糸とで製本するなど多くの行程を経て店頭と並ぶ。草双紙は袋綴じ装丁であるため、一枚の板に、背中合わせの関係にあたる異なる場面が彫られている。(有澤知世)

## 小論文

# 黄表紙と戯作者京伝の魅力的な陰影

Arisawa Tomoyo

## 有澤 知世

国文学研究資料館  
特任助教

安永四年(一七七五)から文化四年(一八〇四)にかけての三十年間、江戸で出版された絵入りの読み物がある。表紙が黄色なので、「黄表紙」と呼ぶ。

紙面はほぼ絵が占め、余白に簡単な詞書が記されている。

内容はナンセンス極まりなく、一例をあげると、人の噂になるほどの色男をうらやましく思った、醜男で大金持ちの主人公が、美しい女性たちに一目ぼれされる、モテ過ぎて男たちに嫉妬されるなどの「色男あるある」を、大

金を投じて自演する話(山東京伝作・画「江戸生艶気蒲焼」)などがある。

大抵十丁〜十五丁(十五丁は十五枚の紙を袋綴じにした冊子ということで、三十頁にあたる)程度の短編であるため、ストーリーを読み解くというよりは、場面ごとに施された趣向を楽しむ。

こういった特徴をもつ黄表紙は、漫画の先祖、江戸時代におけるポップアートとして紹介されることもあるが、その魅力はもっと複雑なところにある。

まず黄表紙の作者は、本業を他に持つ知識人である。

たとえば黄表紙の元祖『金々先生栄花夢』(96頁)の作者・恋川春町は、駿河小島藩士・倉橋格といわれつきとした身分と名前がある。

十八世紀に入って出版システムが整備されたことも手伝い、新興都市であった江戸で、独自の文化が熟し始めた。その担い手は、高級武士や裕福な町人

者であった。

このように、文化人らのサロンで才能が見出され、遊びの内容が出版されてゆくという文化構造が成立していたおおらかな雰囲気の中で生まれた華が、黄表紙だった。そのため、同じ文化圏内にいなければわからない噂話、そして彼らの中で共有されている教養や美意識がちりばめられており、限られた大人の読者だけに赦される愉しみ方があったのだ。

ただ、その一方で、内輪ネタや隠れた知識がわからずとも、絵を読み解いて楽しむことはできるし、地口(ダジャレ)で笑えば良い。

そもそも黄表紙のルーツは、子どもへの年賀として贈られる簡素な絵本・草双紙である。草双紙は、「漉き返し」と呼ばれる再生紙を用いた廉価な書物であり、黄表紙もまた、その体裁を自覚的にとり続けている。正月用に出版されてすぐに消費されてしまうものであるため、時事ネタが好まれ、また、祝儀性が重

といった知識層であり、社会的な立場を持つ彼らは、「本業」を離れた仮の名を使って文芸に遊んだのだった。当時生まれた新しい文芸のひとつが、黄表紙である。

和歌のような正道ではない、脇道に逸れたそれらの新興文芸を、彼らは正道への遠慮と、気恥かしさを込めて「戯作」と称したが、実際は、彼らが持つ知識を縦横無尽に使った知的遊戯であり、同程度の知識人同士の交遊の中で育まれる性格を持つ。

一例をあげると、手拭いの新奇なデザインが掲載される『手拭合』(61頁)は、歌合などの宮中行事のパロディとして行った「手拭合の会」の記録という体裁をとっている。

本書の絵を描いた北尾政演は、後年戯作界にその名を轟かせる山東京伝であるが、まだ若き絵師だった彼を後援し本書を刊行せしめたのは、デザイナー出品者として巻頭に記される「雪川公」、つまり出雲松江藩松平宗衍の御曹司・衍親をはじめとする貴人た

んじられた。

黄表紙は、そんな自意識に満ちた徒花である。したがって、時事性が行き過ぎ、幕政を茶化す作が流行して取り締まられると、戯作界を担ってきた武家作者たちは、あっさりそれを手放してしまったのだ。

ところで黄表紙には「作者」がしばしば顔を出し、内情を述べたり、狂言回しを演じたりする

『手拭合』で登場した奇妙な鼻の男の顔は、『江戸生艶気蒲焼』などの黄表紙作品でも使われ、徐々に戯作者・京伝を示すアイコンとなるが、その顔が多用されるのは、寛政の改革以降、戯作界を担わざるを得なくなった一町人の京伝が、紙煙草入れ店を開業し、「本業」を持つ戯作者像を自ら創出しようとした模索した時期に重なる。

俗文芸の代表格である黄表紙と、江戸戯作の第一人者・山東京伝。どちらも一見親しみやすく華やかで、その実、陰影に富んだ魅力を持つ存在である。

# 長塚圭史「KYODEN'S WOMAN ～アナクロニズムの夢～」

～“戯作的”中央線文化が育んだ「ないじえる芸術共創ラボ」～

延江 浩



Profile

延江 浩 Nobue Hiroshi

1958年東京生まれ。TFMゼネラルプロデューサー、作家。小説現代新人賞、アジア太平洋放送連合ドキュメンタリー部門グランプリ、日本放送文化大賞グランプリ、放送文化基金最優秀賞、日本民間放送連盟エンターテインメント部門最優秀賞など。

吉祥寺の森本病院で生まれて以来、中央線沿線に住み続けている僕は、友部正人さんの『本道』の歌詞にぐっくる。  
その歌詞の一節とは、♪ああ中央線よ空を飛んで／あの娘の胸に突き刺され♪

中央線文化でも西端の立川はまさに多士済々だ。

ディレクター時代、コメントをいただいていた作家の三浦朱門さんや詩人の清水哲男さんは立川高校出身だし（先日村上春樹さんのラジオ番組に出演された）ゴリラ研究者で前京大総長の山極壽一さんは隣の国立高校、音楽界なら志野清志郎は立川で反戦意識を養い、ユーミンは昭和記念公園となった横田基地にある門にちなんで自身の青春時代を歌っている（『LANDRY-GATEの思ひ』）。

かつて沿線には米軍将校の家が建ち並び、夏になればB Dシャツにバミューダパンツ姿の少年たちが遊んでいた。

立川には先端と保守を横断する異彩な風俗文化がある。

ロバート キャンベルさんがその立川の国文学研究資料館館長に就任されたとき、まず口にされたのが「ないじえる芸

術共創ラボ」とそれに伴う、A-R（アーティスト・イン・レジデンス）構想だった。

「これね、知っている方は少ないんだけど。キャンベルさんが小声で言った。「国文研の地下には古典籍が六万冊あって……」まだ広くは知られていない豊饒な文化的地層を掘り起こし、現代の芸術で蘇らしたい。研究者のみならず広く国民に使用してもらいたい。A-Rとはあたかも資料館に住んでいるが如く日常的に芸術家を通い、古典籍に触れながら新しく文化を生み出すシステムである。そのアーティストを推薦してくれないかとのキャンベルさんの投げかけに、思い浮かんだのが劇作家で演出家の長塚圭史だった。

僕はそれまでの圭史の芝居を全て見ていた。

彼は文化庁の留学生として英国留学もしている。現代演劇の気鋭の演出家として言葉というものを縦横に生かし、世の中を刺激し続けている若き達人が、地下に眠る古典籍とどう格闘するか、どう遊ぶのか。自分の興味もあって彼の名前をあげ、圭史は文化庁でのA-R記者会見に臨んだ。

圭史が中央線で何度も足を運び、こらえたのが『KYODEN'S WOMAN ～アナクロニズムの夢～』である。

国文研の閲覧室を演劇空間に役者と観客が歩き回りながら展開する企画がコロナ禍のために朗読劇の上演となったが、戯作者山東京伝の黄表紙作品に刻まれた数々の言葉が目の前に現出し、戯作らしい柔らかいユーモアに小学生らしき女の子がケラケラ笑ったり頷いたりして、キャンベル館長が求めていたのはまさにこれだと首肯した。

プロジェクト初回の打ち合わせ後、国文研の皆さんと立川の餃子屋（ぎょうざ天国）に行った。圭史と僕は出された餃子の異界的巨大さに眩暈を覚え（しかもお持ち帰り不可）、ビールに酔って中央線に乗り、そういえば圭史の劇団名が「阿佐ヶ谷スパイダース」だったと思いついた。そしてキャンベル館長の自宅も阿佐ヶ谷駅だとも。♪ああ中央線よ空を飛んで／あの娘の胸に突き刺され♪僕は友部正人の『本道』を口ずさみ、西から東へ文化が進むのもいいものだとひとりごちた。



Liang YaXuan

梁 亜旋

現代芸術家

過去との対話が叶った  
その瞬間の印象・感情を  
鮮やかに描く。

貴重なことがらや、ひっそりと  
受け継ぐべきことがらを記す  
ために用いられた巻子本（巻  
物）にロマンを抱く、梁亜旋。  
記録に残りにくい、庶民の暮ら  
しぶりや民間信仰の様子が描  
かれた絵巻をとおして、過去の  
人々と対話し、新しい表現を以  
て現代に伝える。

AIR就任期間 2018年7月～

梁亜旋 紹介ページ

[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/ryo/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/ryo/index.html)



中国生まれ。2017年、年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科大学院修士課程修了。宝塚大学東京メディア芸術学部元助教。アートプロジェクト「Recreation of Asian Traditional Arts Project (RATAP)」創立者。現在はアーティストとして活動しながら、アジアの伝統民間芸術に関する保護と研究も熱心に行う。

梁 4 「NO.1」



梁 5 「NO.2」



梁 6 「NO.8」



梁亜旋「FUNNY FACES」series  
「NO.1」「NO.2」「NO.8」(2020年)

絵画作品(ミクストメディア 530mm×455mm)

古典籍に描かれた「顔」を、「人間」「妖怪」などのタグで検索できるデータベース「顔貌コレクション」を活用して面白い顔を選び、初見の印象を、色彩や描線を以て拡大して描いたシリーズ。古典籍における絵画の筆遣いに関心を抱き、輪郭線を際立たせる。「NO.1」「NO.2」は、江戸時代後期の絵本『神事行灯』、「NO.8」は絵巻『虫物語』がモチーフ。



### 庶民の文化を今に繋ぐ

意識的に残される機会がないため、中国農村部の伝統文化や美術がだんだんと忘れ去られてゆくことに危機感を持ち、自身の表現をとおしてそれらを発信することを目指している梁さんが、ワークショップで出会った日本の絵巻には、公的な資料では残りにくい、かつての暮らしの風景や民間信仰が、鮮やかに描かれています。

梁さんが最初に創作のモチーフとしたのは、絵巻『百鬼夜行図』。夜中に京都を練

梁 2



梁亜旋「Ghostly」(2019年)

インスタレーション作品(巻物、アクリル板、ワイヤー、LEDライト、蚊帳)

絵巻の持つ神秘性に惹かれた作品。暗い部屋で、絵巻「百鬼夜行図」(80~81頁)を見ていると、妖怪達が巻物から飛び出してきた、というイメージから作られた。上から吊るした妖怪の姿(アクリル板製)がライティングされることにより、空中に妖怪が浮かび上がり、床面に広げた白紙の巻物に映り込む。



### 梁亜旋展「Inheriting and recreating the classics 古典から再構築へ」

東京都千代田区の文房堂ギャラリーにて開催した個展の様子(2021年1月18日~23日)。「A Mountain」をはじめ、古典籍からインスパイアされた新作を展示。絵巻の描線に着目し、輪郭線を意識的に用いた「FUNNY FACES」など、梁氏にとって新たな表現を切り拓いた作品が多く展示された。また、「顔貌コレクション」を活用し、古典籍の中から面白い顔を探して仮面をつくるワークショップを行った(動画URLは79頁)。

画面処理方法を、三次元での表現に援用した「A Mountain」は、二〇一九年末から猛威を振るい続ける新型コロナウイルスで命を落とした方の鎮魂の願いを込め、チベット仏教において重要視される「聖山巡礼」をテーマにした作品です。

さらに、デジタルアーカイブされた絵巻などから顔を検索することのできるデータベース「顔貌コレクション」を活用した「FUNNY FACES」シリーズでは、日々進化し続ける技術を駆使し、過去と繋がる新たな扉を開きました。



### 梁亜旋 「A Mountain」 (2020年)

立体作品  
(W450mm×D450mm×H650mm  
ミクストメディア)

チベット仏教にとって重要な「聖山巡礼」をテーマとし、新型コロナウイルスにより命を落とした方の鎮魂の願いを込めた作品。すやり霞や異時同図法といった、絵巻に見られる画面処理の方法を、立体作品において取り入れるという意欲的な試みがなされている。また、16世紀~17世紀の日本において、布教や寺社への参詣者を誘致する目的でつくられた「参詣曼荼羅」を思わせ、細部を読み解く楽しみも与えてくれる。



り歩く恐ろしい妖怪の行列と、長い年月を経た器物に魂が宿ることとなる「付喪神」のイメージとが結びつき、ユーモラスな道具の妖怪たちが人間のようには練り歩く様子が描かれる絵巻です。

「Ghostly」は、右から左へと絵巻をひらくにつれ、次々と妖怪が出てくる楽しさからインスパイアされたインスタレーション作品で、光と影の効果により、妖怪が絵巻から飛び出す様を表現しました。

一方で、絵巻に見られる、すやり霞や異時同図法といった

## ワークショップを経て

巻子本がかつてどのように読まれ、受け継がれたのかといったことについて、最新の研究成果を学び、また、右から左へと少しずつひらいて鑑賞する方法を体得した梁さんは、絵巻そのものが持つ呪術性や祝儀性についての理解を深め、作品創作の基盤とした。付喪神や信仰、人々の暮らしといったさまざまなモチーフに関心を抱き、精力的に追求した新たな表現の成果を、二〇二二年一月、「梁亜旋展 Inheriting and recreating the classics」(於・東京都千代田区文房堂ギャラリー)で発表した。



個展会期中に行ったワークショップの動画  
<https://www.youtube.com/watch?v=l7mNp8xrXCs&t=1388s>



古典インタプリタ日誌(ワークショップ詳細)  
<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#ryo>



- ① 絵巻からインスパイアされた作品についてイベントで語る。
- ② ③ 絵巻の扱い方について学びながら、様々な作品を閲覧。その独特の鑑賞形態は、作品創作に大きく影響した。
- ④ 古典籍の形と内容のかかりについて深く学んだ。

梁 10



ちょうごんか しょう  
『長恨歌の抄』 江戸前期写 卷子 3軸 縦32.9cm×全長 上巻1209.9cm、中巻1273.1cm、下巻1173.6cm

万治・寛文頃に刊行された絵入り版本『やうきひ物語』3巻3冊を元にした絵巻。版本の『やうきひ物語』は玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を詠んだ白楽天の詩文『長恨歌』の抄物(解説・注釈)で、仮名草子作者の浅井了意が版下を手がけているが、内容から作者である可能性も指摘される。『長恨歌』の抄物の絵巻は大阪大谷大学図書館蔵本など10点余りが知られている。本書は人物を大きく、容貌もふっくらと愛らしく描くという特徴がある。(糸汐里)

梁 8



うら  
『浦しま』 江戸中期頃写 卷子 1軸 縦31.6cm×全長929.1cm

室町から江戸期にかけて多数作られた短編の物語草子、お伽草子の一作品。古代の神仙思想を背景とする「浦島子伝」から派生したお伽草子の『浦島太郎』は、童謡で知られるストーリーと異なり、助けた亀が女と化して浦島太郎を竜宮城へと誘い、2人は夫婦の契りを結ぶ。故郷に帰り、玉手箱を開けてしまった浦島は、鶴になってしまったという。本文には玉手箱から「三筋の紫の雲」が立ち上ったとあるが、挿絵には不吉な赤い炎が描かれる。(糸汐里)

梁 7



ひゃっき やぎょうず  
『百鬼夜行図』

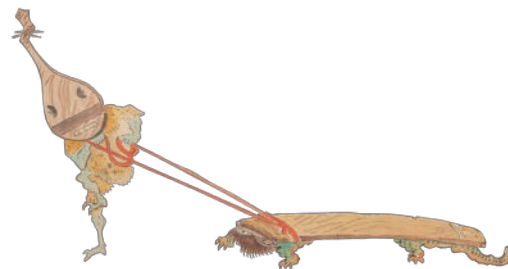
江戸後期写  
卷子 1軸  
縦 31.4cm × 全長 701cm

百鬼夜行は鬼や妖怪が深夜に大路を練り歩く様を言い、平安京の貴族に恐れられた怪異で、『今昔物語集』などに遭遇譚が見える。室町時代になると、器物や動物の化け物による行進を描いた「百鬼夜行絵巻」が登場し、多くの絵巻に仕立てられた。現存最古とされる京都・大徳寺

真珠庵蔵の絵巻は、江戸時代を通じて盛んに模写され、本作もその一つとみなされる。諸本の多くは末尾の「赤い球体」あるいは「朝日」に逃げ戻る妖怪を描くのだが、本作は残念ながら巻末を欠き、その出現前で終わる。(恋田知子)



ぶんしょう  
**『ぶんしょう』** 江戸前期頃写 卷子 3軸 縦34.2cm×全長上巻1576.3cm、中巻1277.2cm、下巻1500.5cm  
 ひたちのくに かしまだいみょうじん だいぐうじ ぶんしょう  
 お伽草子。常陸国鹿島大明神の大宮司に仕える男が、塩焼きで富を得て文正と名乗る。授かった美しい娘は帝の后となって皇子を産み、文正は大納言まで出世したというめでた尽くしの物語。正月の読み初めにふさわしいとされ、嫁入り本としても好まれた。それゆえに多数の伝本が伝わる。本書も嫁入り本として制作された一本とみられ、華やかな下絵が施された詞書料紙をもち、人物の装束、調度に至るまで細密な挿絵を有する優品である。(糸汐里)



小論文

## 魅惑の絵巻

Koida Tomoko

恋田 知子

慶應義塾大学

文学部 准教授

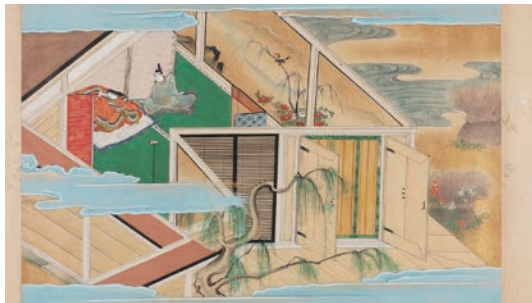
絵巻の源流は中国の画巻がかんに求められるが、日本では絵と物語とが結びつき、「物語る絵」として独自の発展を遂げた。通常縦三〇〜四〇cm程度の紙を貼りつなぎ、九〇〇〜二〇〇cm程度の長さに仕立てられるが、全てを広げて観るものではなく、肩幅ほどに少しずつ開きながら鑑賞された。紙を継いで作られる横長の画面は、部屋の空間として鑑賞する掛け軸などとは異なり、目で全体を把握することができない。自分の手で触れながら開き、巻く動作を繰り返すという、いささか

労力を伴うものであるのだが、それゆえ読者の自由に物語を読み進めることができ、物語世界に感情移入しやすい形態と言えるだろう。絵巻には物語世界に入り込み、より親密に鑑賞できる、さまざまな表現上の工夫も見てとれる。

#### ◆ 物語世界を覗き込む

絵巻や絵本、掛け幅絵などには、しばしば帯状の雲や霞を何層にも重ねたものが描き込まれている。「すやり霞」と呼ばれるもので、金箔を細かくした砂子で埋め尽くしたり(『浦しま』80頁)、水色に白の縁取りが施されたり(『ふんしやう』82頁)と、作品によって多様な色や形状で表され、絵師の個性がうかがえる。すやり霞を配置し、俯瞰で情景を描くことで、物語世界を覗き込んでいるような工夫がなされており、些末な部分を省略して描きたい部分に焦点を絞る効果や場面転換の意図などからも盛んに用いられた。物語を俯瞰で描く方法としては、吹抜屋台とい

う技法も多用されている。上から覗くのを阻む屋根や壁を省略し、室内の様子を描くのである。文正長者の娘の姫君と中将を描いた掲載図は、燭台の灯火から夜の場面であるところから、襖絵の鴛鴦には仲睦まじい二人の行く末を暗示させ、二人の逢瀬を読者の我々が覗いているかのような構図と言えよう。



『ふんしやう』江戸前期写、卷子3軸のうち下巻第3図。

絵は、子どもでも扱いやすいことから、幼少の読者が想定される。一方、性的な欲望や主従にまつわる葛藤を描いた物語なども伝わっており、小絵の持つ非公式な性格から、文化的教養のある男性による私的な鑑賞を目的とした可能性なども指摘されている。自分だけの絵巻を所有したいという当時の人々の願望が垣間見える。

#### ◆ 妖怪たちのパレード

開くごとに新しい場面が展開する、そんな絵巻の特徴と魅力を存分に味わえるのが、「百鬼夜行絵巻」である(『百鬼夜行図』80～81頁)。器物の妖怪である付喪神は、『不動利益縁起』や『融通念仏縁起』における疫神など、鎌倉時代から絵巻に描かれた。室町時代になると、付喪神や鬼、獣などの妖怪たちが行列する様を描いた「百鬼夜行絵巻」が登場し、数多くの絵巻に仕立てられた。行列それ自体、平安・鎌倉時代の障屏画や縁起絵巻など盛んに描かれ、物語の展

開上必ずしも必要でなくとも、多くの絵巻に取り入れられており、祭礼行列図としての展開も見せる。そこには、当時の祭礼や風流の作り物の反映なども見てとれる。行列は右から左へと時間が流れて空間が移動する絵巻というメディアの特性を活かす画題であった。妖怪の行列を描くのも、次々に多種多様な妖怪を登場させることで、妖怪世界の豊かさを表現したのであろう。

ちなみに、卷子装は古代より正規の書物を保管するのに用いられた。秘伝の書を意味する「虎の巻」は今でも巻物として想起されるように、大事なことは經典しかり、系図しかり、巻物にして伝えられるのだ。それは手にした者以外には中身が見えず、巻くことで内容を封じ込めることができる巻子の特性による。この巻子の持つ秘匿性に注目するならば、諸本の大半が冊子ではなく巻子に仕立てられた「百鬼夜行絵巻」には、妖怪たちを封じ込める意味をも読みとることができないのではないか。

## ブックディレクターから見た 「ないじえる芸術共創ラボ」

幅 允孝



写真・藤田一浩

### Profile

幅 允孝 Habu Yoshitaka

ブックディレクター。人と本の距離を縮めるため、公共図書館や病院、動物園、学校など様々な場所でライブラリーの制作をしている。最近の仕事として札幌市図書・情報館の立ち上げや、ロンドン、サンパウロ、ロサンゼルス、JAPAN HOUSEなど。安藤忠雄建築の「こども本の森中之島」ではクリエイティブ・ディレクションを担当。近年は本をリソースにした企画・編集の仕事も多く手がける。早稲田大学文化構想学部、愛知県立芸術大学デザイン学部非常勤講師。

先日何気なくニュースを見ていたら、「J・C・JK流行語大賞（株式会社AMFによる）の三位に『びえんヶ丘』と『いー助』なる言葉がランクインしていて、私には全く意味がわからなかった。有名インフルエンサーが生み出したこちらの言葉は、軽度の悲しみや落胆を表す『びえん（泣いている様の擬態語）の最上級表現ということのようだが、知人の中学校教師に聞くところではよく耳にするそうだ。世界は広いものですね。それと、同じように研究者以外の人には読むことすら難しい古典籍の言葉も、正直にいうと私には縁遠いものである。

ところが両者に共通するのは、それらの言葉は確かにある時代、ある場所では機能している（いた）ということだ。誰かが何かを伝えようとした時、人は最も有効だと判断した言葉とそれがまとうアトモスフィアを選んで使う。古今東西、人が何かを伝えようとする時、その感情やアイデアの橋渡しをする道具として言葉があり続け、受け手はそれを読み込み考えることで自身を駆動させてきた。

「ないじえる芸術共創ラボ」は日本語の古典籍をデジタルデータ化、整備し、国内外への発信を通じてその魅力を伝えている。何度か展示を拝見し、メンバーと話をすることで、その最大の強みは古典籍文献の精密な読み込みと理解にある。でももう工夫などもしている。

もっというなら最近床材のことまで考えているのだから何屋かわからない。新刊書架の前は人の回転を促すため固めのPタイルを選び、哲学や心理学など没入に時間を要するジャンルの書架下のカーペットは毛足を八ミリ長くする。知らない本を偶然手に取ってもらう環境を作るため、椅子の座面の高さやマテリアルを吟味し、照明計画に腐心する。だが、それは洒落た読書空間を作るためではなく、屈みにくい本を何とか届けようとするもがきである。

誰かの絞り出したテキストを伝えようと「もがく」仲間として、「ないじえる共創ラボ」に対し私は勝手にシンパシーを感じているのだが、きつとこれからは未来向きに進み出した古典籍をどう差し出すのかも考えていかねばならない。私がライブラリーを作る時は、「気が付けば読んでいた」という居心地をどう整えるかをいつも考えているのだが、国文学研究資料館に女子中学生がふらりやって来て、気がつけば『雨月物語』を読み『びえんヶ丘』ですこい之助的な気分になっている未来と一緒に描きたい。その頃まで、『びえんヶ丘』という言葉を使っているのかは、わからないけれど。

ることがよくわかったが、私が何よりも感銘を受けたのは、そこで書かれている過去の言葉を何とか未来に生かそうとかがいている部分だった。この研究者たちが様々なクリエイターや翻訳者と結び目を作り、その過程を含めて新しい化学変化を起こしていく。そこそ言葉にすると簡単だが、未知なる他流試合の連続は、眠れる古典を叩き起こすための目覚まし時計のようなものだったのかもしれない。

私はブックディレクターとして、近年は公共・私設問わず様々なライブラリー作りをしている。が、近年はそこにどんな本を置くべきかという選書に加え、それらの本をどう差し出すのか？という点が重要になってきていると感じる。

Googleがライブラリープロジェクトを始めて以来、すべてのリアルな本の場所は「選択の結果」となった。となると、それらの選ばれた書物がどんな意図で集められたかを瞬時に視認してもらおう的確なサイン計画や、NDCを中心とした既存分類法の再編集は本棚というメディアをキュレーションしていく上で必須だろう。また、時間の奪い合いがとも激しいこの世の中で敢えて本を手にとってもらうため、書物の中のアフォーリズムを彫刻化して中空に浮かせたり、インタラクティブな映像を使って本の部分を垣間見せ感じ

「どの先生に

弟子入りする？」

模写をすることで、先人たちに問いかけを繰り返した。

黄表紙を解体し、模写し、装丁して、書物のモノとしての特徴を理解したり、デジタルアーカイブの海を探索して江戸時代〜明治の絵手本を模写し、いにしへの絵師たちの筆致を学んだり……古典籍をひらくと、いつでも偉大なる先生たちが待っていた。過去との対話をとおしてつかんだ、松平莉奈にとつての「古典」とは。

Matsudaira Rina

松平 莉奈

画家



AIR就任期間 2018年10月～

松平莉奈 紹介ページ

[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/matsudaira/utsushinonarai/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/matsudaira/utsushinonarai/index.html)



兵庫県生まれ。2014年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻日本画修了。「他者について想像すること」をテーマに、人物画を主とした絵画を制作。主な展覧会に、個展「悪報をみる—日本霊異記を絵画化する—」KAHO GALLERY / 京都 (2018)、個展「insider-out」第一生命ギャラリー / 東京 (2017) など。賞歴に「京都府文化賞奨励賞」(2020)、「京都市芸術新人賞」(2017)、「VOCA展」佳作賞(2015) など。



松平莉奈  
『『金々先生栄花夢』  
模写』(2019年)

模写作品(和紙、墨、染料、糸)ワークショップで、当館蔵『金々先生栄花夢』(96頁)の複製本(参考展示)を元にした模本(コピー用紙製、『金々先生栄花夢』の複製を一度解体し、スキャンしたデータをコピー用紙に印刷した「製本キット」を製本したもの)を作り、それをまた解体し、上げ写しの手法で模写を行い、製本した写本。



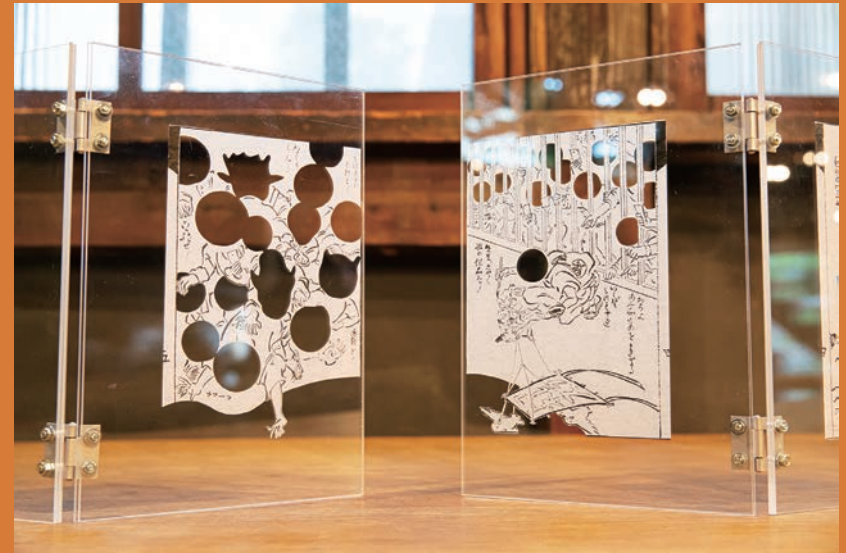
松平莉奈「デジタルアーカイブ模写をするときの準備物」(2020年)

模型(パソコン、筆、絵皿、雑巾、墨液、スポイト:段ボール・紙 筆洗:プラスチック、模写見本:和紙・墨) 2020年11月に開催した個展「松平莉奈展 うつしのならび ―絵描きとデジタル・アーカイブ―」(於ロームシアター京都)での展示に耐えるよう、段ボールや紙で、松平氏の机上を表現した作品。なお、使用する道具やデジタルアーカイブ模写の方法の詳細は、サイトで公開されている(95頁)。

元々古典モチーフを意識的に扱っていた松平さんは、以前、黄表紙『金々先生栄花夢』(96頁)を題材にした「菌菌先生」(二〇一七年)を発表しています。

当時は『金々先生栄花夢』の吹き出しのような表現に関心がありました。さらに深く黄表紙の世界を探ってゆくために、黄表紙の製本と模写に取り組み、書物がどのようなパーツでできているのか、どのような工程を経て冊子の形になるのか……などを、身体的に理解してゆきました。

古典がもっと自由になる



松平莉奈「作者の手の内夢の内」(2019年)

絵画作品(和紙、アクリル板、墨)

戯作者が現代へタイムスリップし、作品の面白さで人気者になるが、次第に他者の期待が過剰になり……という筋。黄表紙の全盛期の短さに、現代のSNS文化の在り方を重ねる。「5丁1冊」「袋綴」などの構造に着目し、黄表紙を製本する前のような形に仕立てた。なお戯作者の顔の穴は、黄表紙において〇で顔を表す手法(62頁【長塚14】)と、戯作の手法「穴をうがう(誰も気づかないことを鋭く指摘する)」に拠る。(有澤知世)

松平 15 -KINBE-



松平 16 -OMAZU-



松平 17 -GENSHIRO-



松平 18 -MANPACHI·GUICHI-



松平莉奈「金々先生夢のTOKYO REMIX」シリーズ (2021年)  
(-KINBE-/-OMAZU-/-GENSHIRO-/-MANPACHI·GUICHI-)

絹本着色(絹本、墨、染料、岩絵具)、455mm×530mm

作品はそれぞれ、黄表紙『金々先生栄花夢』(96頁)の登場人物名を冠する人物画ではあるが、黄表紙の文学史的な情報や特徴的な描写方法をいったん排し、陶器のような肌の質感や柔らかい描線、特徴的な表情といった松平作品らしさを全面に出す。背景には『金々先生栄花夢』中の名台詞と、iPhoneの絵文字等を模倣的に配した。ワークショップや模写をとおして習得した「古典」なるものが、自身の表現と自然に溶け合うことを目指した意欲作。

松平 10



松平莉奈「デジタルアーカイブ模写『九老画譜』」(2020年)・  
「デジタルアーカイブ模写『福善斎画譜』」(2020年)

模写作品(和紙・墨、ポスター表装)

絵手本(絵の教科書)のデジタルアーカイブ画像を模写し、さらに、手本とした絵手本についての情報、松平氏による解説、実践した模写の方法などを記してポスター状に仕立てた。松平氏が提唱する「デジタルアーカイブ模写」は、WEB上で公開されているアーカイブ画像を活用することで、だれでも、いつでも、どこでも、いにしへの先生たちに弟子入りし、絵を学ぶことができるという趣旨で考案された。

の雰囲気や、筆をとおして知ることができると思います。  
古人との「対話」をもっと気軽にするために提案したのが「デジタルアーカイブ模写」。  
WEB上で見られるアーカイブ画像にアクセスして模写を行うとどうなるだろうか? という実験です。五十点もの模写を行い、いにしへの先生たちと向き合った松平さんは、現代を生きる自分と「古典」との距離感を自然に感じられるようになったといいます。自由な表現へと立ち返り挑む「金々先生夢のTOKYO REMIX」です。

## ワークショップを経て

黄表紙の製本や模写をとおし、書物の構造の理解を深めた後、黄表紙が生まれた背景を探るため、洒落本(遊里を舞台にした会話体の読み物)などを手がかりに、遊里ではぐくまれた「通」という美意識を探り、「作者の手の内夢の内」の創作に至った。

その時の体験から、模写を通じて過去の時代を理解したいと考え、デジタルアーカイブ模写を考案。日々進歩する古典籍のデジタルアーカイブやその活用方法について、研究者と行った議論が活かされた。



松平莉奈「『金々先生栄花夢』模写」の全貌

[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/matsudaira\\_handwriting\\_copy.pdf](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/matsudaira_handwriting_copy.pdf)



松平莉奈の「近世近代絵手本デジタルアーカイブを絵手本として利用するサイト」

<https://ehonlist.matsudairarina.com/>

※デジタルアーカイブ模写の詳しい方法や、絵手本のデジタルアーカイブについての情報を紹介



デジタルアーカイブ模写の実践動画「どの先生に弟子入りする？」

<https://www.youtube.com/watch?v=G-WhRzcjHbg&feature=youtu.be>



古典インタプリタ日誌(ワークショップ詳細)

<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#matsudaira>



デジタルアーカイブ模写作品(92頁)の各絵手本についての情報

○紀梅亭「九老画譜」(1797年刊)

<https://ehonlist.matsudairarina.com/posts/11449289>

○丹羽嘉言「福善斎画譜」(1814年刊)

<https://ehonlist.matsudairarina.com/posts/11449673>

①「金々先生栄花夢」のレプリカを活用して黄表紙の製本を行う。 ②「デジタルアーカイブ模写」による作品と、模写を行うための準備物の展示風景。

③葛飾北斎「略画早指図」を手本にデジタルアーカイブ模写し、その様子を生配信した。 ④ワークショップでさまざまな形の古典籍に触れた。

松平 5



よしわらせいろねんじゅうじ  
**『吉原青楼年中行事』** 十返舎一久作・喜多川歌麿画 享和4年(1804)刊 半紙本 2冊

吉原の慣例や行事、遊客の心得などについて、美しい絵画と文章で綴った一書。上之巻には「仲の町年礼之図」、「仁和嘉之図」等の十図、下之巻には「八朔之図」「餅つき之図」などの九図が彩色摺りで備わり、当時の吉原の風俗が生き生きと描かれる。下之巻「信鋪張付彩工図」は、歌麿自身と思われる絵師が、妓楼の壁に鳳凰の絵を描く場面で、当時の画師が用いた画材が知られる点でも興味深い。(有澤知世)

Commentary

松平 2



きんきんせんせいえいがのゆめ  
**『金々先生栄花夢』** 恋川春町作・画 安永4年(1775)刊 中本 2巻2冊

黄表紙の祖。簡素な絵本である「草双紙」の形式に、花柳界の風俗を写実的に描き当時第一線の文芸であった「洒落本」の性格を与えて、大人向けとした記念碑的作品。社会的地位のある知識人が戯名を使って執筆し、仲間内で楽しむ文芸として成立し、30年間江戸で出版された。「金々」は「最新流行」の意の流行語で、田舎の青年が江戸で富豪の養子となり、通人ぶって豪遊する様子を滑稽に描く。(有澤知世)

Commentary



こうりんが ぶ  
『光琳画譜』

中村芳中画  
享和2年(1802)刊  
大本 2巻2冊

尾形光琳に私淑した中村芳中が、光琳のモチーフ集としてまとめたもの。まるで筆で描いたかのような墨の描線やたらし込みの表現など、版元・金花堂(近江屋与兵衛)が当時の印刷技術を駆使した、版本としての最高峰に位置しよう。全体として丸みを帯びたタッチにより、人物や神仙、動植物などが淡い色合いで描かれ、背景を極力排し、余白をも絵の一部として読者の目を楽ませる。国文研蔵本は「六歌仙」図に押圧による空摺りが用いられる初印本と見られる。(木越俊介)



『唐詩選画本』

橘石峰、鈴木芙蓉他画  
天明8年(1788)~天保7年(1836)刊  
半紙本 7編35冊

折からの画譜の流行に乗り、唐詩のアンソロジーである『唐詩選』を絵本化したもの。既に『唐詩選』の国字訳の企画を成功させていた版元・嵩山房(小林新兵衛)は、その中の『唐詩選国字解』を本書の詩解部分にふんだんに利用している。また、初編から六編までは全て異なる絵師が手がけているが、初・二・四編の絵には中国の画譜『八種画譜』のうちの唐詩を材としたものからの影響が強い。本書が立案された背景には、当時の『小倉百人一首』の絵入本の流行があったことが、初編の序跋などから窺える。(木越俊介)

## 小論文

# 画譜のゆくえ

## —— 絵手本について ——

Kigoshi Shunsuke

木越 俊介

国文学研究資料館  
准教授

画譜とは何か。小林宏光「中国版画史論」(二〇一七)には、「まず絵画技法を図解した画法書の意となり、基本的に挿絵版画が不可欠の要素で、これに画論や絵画制作法をともしない、時に画史、画家伝をそなえ、絵画学習、実制作に役立つ内容の歴史的な書物を指す」という、簡にして要を得た定義が備わる。さらに「加えて、やや広義にとらえ、画論や画法をともしなくなるとも、直接或いは間接に、絵画制作、鑑

賞に有効な内容を持つものも含む」とされ、その示す範囲は思いのほか広い。以下、手短に日本における画譜について記すが、本場・中国における画譜の展開については小林前掲書に詳しいのでそちらをご参照いただきたい。

さて、画譜は明清代の中国で盛んに出版されたのだが、日本にはいかなる影響を与えたのだろうか。たとえば、明末の万曆三十五年（一六〇七）刊『図繪宗彝』は同じ世紀内には日本に輸入され、元禄十五年（一七〇二）に至ると和刻本が刊行される。また、清初に刊行された王概等撰『芥子園画伝』（初集・六七九年刊）は一七〇一年に刊行された二、三集とともにやはり輸入され和刻本が刊行される。同時に、清から日本へ来た画家による影響も大きく、沈南頻（一六八二～？）などは日本における南画の広まりにおいて逸することのできない重要な存在である。

し、京都では円山派や四条派の画家の画譜が多く刊行され、十九世紀に入ると色刷の美しさが一際目を引くものが増える。中でも『光琳画譜』は、尾形光琳（一六五八～一七二六）の筆を印刷によって再現しようとする意気込みが窺えるとともに、当時の印刷技術の粋を集めた、絵本史に残る傑作である。この後も画譜はさらに多様に展開するのだが、おおまかな傾向としては、一人の画家のエッセンスを堪能できる画集のような形態のものが増える。江戸後期の、浮世絵以外の絵を知りたい向きには、あたかも現代の美術界におけるポートフォリオのような役割をも果たしてくれるかもしれない。

画譜は印刷された複製物であるという点や書物という形態など、一枚絵に比すれば美術品としてやや軽く扱われてきた側面は否定できない。しかし、絵本（絵入本）という様式自体に注目が集まるようになって

このように当初は受容を専らとする立場にとどまっていたが、やがて日本独自の画譜制作が試みられるようになり、そこには中国由来の南画と日本の狩野派などの大和絵とが併載されることとなる。その初期の代表的画譜が、正徳二年（一七二二）刊の林守篤画『画筌』であり、この時期以降、とりわけ大坂において和製画譜が盛んに刊行される。守篤と同様、狩野派に学んだ橋守国（一六七九～一七四八）も『絵本写宝袋』（享保五年（一七二〇）刊）をはじめ、多くの絵手本を手がけている。

また、花鳥画譜である『明朝紫硯』（延享三年（一七四六）刊）は、『芥子園画伝』を模倣した書であるが、和製画譜としては初めての多色刷りであり、画譜の展開が印刷技術の発達とともにあったことも忘れてはならない。

十八世紀後半以降の画譜は百花繚乱の様相を呈した今日では、その評価の高まりとともに研究も盛んに行われるようになっていく。そして、こうした画譜を見るにはデジタル・アーカイブが格好の道案内役となってくれることだろう。もちろん、実物を手に取るのが一番であることはいうまでもないが、実際にはそれが叶わないことが多いし、残念ながら、美術館における展示などでは、本という形態ゆえに一冊につき見開き一丁（二頁に相当）という制約がつきまとう。かたやデジタル上の本は、お好みの画譜を探し、めくりながら（クリック、スワイプしながら）画家の筆遣いを堪能するもよし、模写するもよし、比べるもよし、自由に開かれていく。

今後、画譜はこれまで以上に私たちの身近なものとなっていくはずである。

# 「投企する古典性」としての 「ないじえる芸術共創ラボ」

飯倉 洋一



Profile

飯倉 洋一 Ikura Yoichi

大阪大学大学院文学研究科教授。九州大学大学院博士後期課程中退。同大学助手、山口大学助教授などを経て現職。博士(文学)。主な編著書に『秋成考』(翰林書房、2005年)、『上田秋成 絆としての文芸』(大阪大学出版会、2012年)、『前期読本怪談集』(国書刊行会、2017年)など。

「ないじえる芸術共創ラボ」は、普段私たちが研究対象としている古典籍を、芸術家の創造の材料あるいは契機にしてもらうため、研究者がそれに関わって芸術を共創するというプロジェクトだと理解している。古典籍を活かし、研究者にも芸術家にもプラスとなるのが理想。私が少しでも関わった限りでは、それは上手くいったという印象を持っている。

ないじえる芸術共創のコンセプトは、「投企する古典性」(私なりの解釈では、古典を未来志向で考えるプロジェクト)という、私も参加させていただいた日文研の荒木浩教授企画のプロジェクト(二〇一六年度〜二〇一九年度)と親和性が大きいと感じている。その親和性の象徴がA-I-Rの一人である松平莉奈さん(とその絵)である。松平さん自身、荒木プロジェクトに参加し、発表もしているが、「投企する古典性」プロジェクト成果として世に問われた「古典の未来学」(文学通信、二〇二〇年)という分厚い本の表紙の絵を描いて話題になった。その原画が、二〇二〇年十一月に行われた、

松平莉奈展「うつしのならびー絵描きとデジタルアーカイブ」で特別展示されていた。

「うつしのならび」は、国文研の古典籍画像データベースに載せられている画像を中心に、江戸時代の絵手本数十種を選び、松平さん自身が、それを模写した絵を展示したものだ。模写の技術もさることながら、興味深かったのは、模写する対象の選択だった。現代画家である松平さんの創造力のアンテナがとらえた絵がそこには並んでいた。その場に、「古典の未来学」の表紙絵は、実によくマッチしていた。

遡って二〇一八年の七月のこと、古典インタプリタの有澤知世さんから連絡があり、十八世紀の江戸文芸、とくに雅俗概念について、松平さんにレクチャーをしてほしいという依頼があった。荒木プロジェクトで知り合っていたこともあって、松平さんが指名してくださったとのこと、私は一〇〇枚以上のスライドを準備した。ところが雅俗の概念は、図式的に説明すると一見簡単なのだが、「筋縄ではいかないところがある。普段の授業ではさらっと説明するところ

るを、私は自分なりに少し突き詰めて考えたために、わかりにくい説明になってしまった。ないじえる芸術共創の場だからこそ、私は現代において、十八世紀の雅俗観がどういう意味を持つのか、あるいは現代の目から十八世紀の雅俗観はどう見えるのかを意識せざるを得なかった。それが私を混乱させたのであるが、研究者の混乱とは、新たな問いの発生に他ならない。私はそこから新たな雅俗論の手がかりを得た気がする。松平さんに何かヒントを与えられただろうか。

研究者と芸術家の共創を、短期間の試みで終わってしまうたら、その可能性も小さな波で終わってしまうだろう。うまくいかない時もあるかもしれないが、共創を持続的に行うことによって、広く、深く、多様な試みが可能となり、小さな波がビッグウェーブとなるだろう。その結果、研究にも芸術にも、新たな地平が拓かれるはずだ。そのためには、是非、この事業の国文研全館挙げての、持続的な取り組みをお願いする。

Peter · J · MacMillan

ピーター・J・マクミラン

翻訳家



「Who is “making a path through the fallen leaves”?  
The stag? The poet?」

言語をとおして、  
和歌の美意識を探る旅へ

「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の 声聞  
くときぞ秋はかなしき」は百人一首で  
おなじみの和歌だが、英訳しようとす  
るとき、主體が省略されていること  
に気付く。紅葉を踏み分けているの  
は、和歌の詠み手か、それとも鹿か。  
二つの世界観の境目の曖昧さが魅力  
だと考えたマクミランは、敢えて主  
語を入れずに英訳した。マクミラン  
の翻訳の軌跡は、和歌が背負う美意  
識を探る旅路でもあった。

TIR就任期間 2017年10月~2020年3月

ピーター・J・マクミラン 紹介ページ   
[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/macmillan/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/macmillan/index.html)

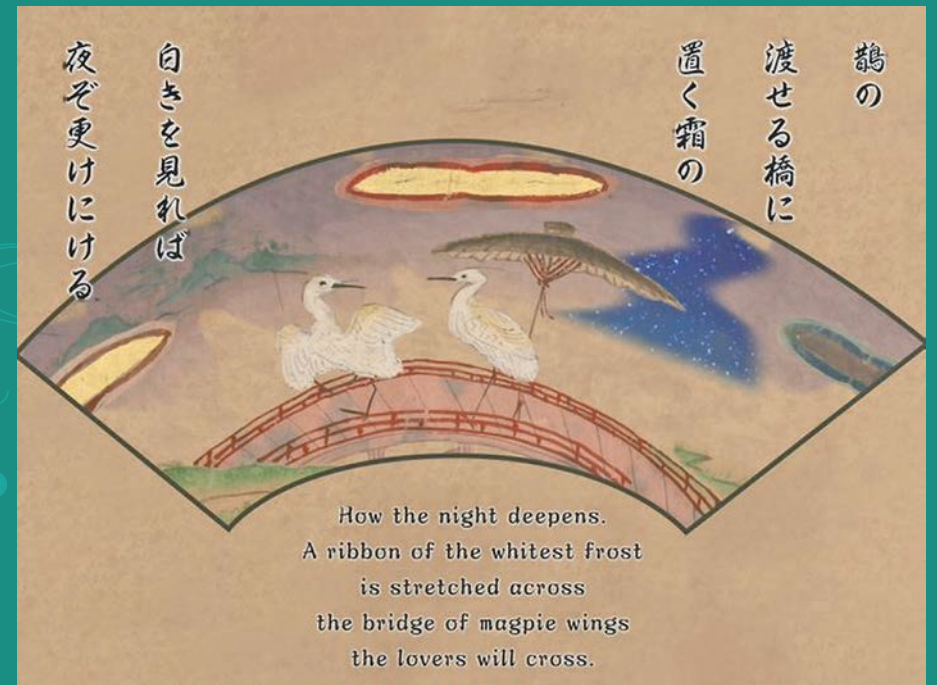


アイルランド生まれ。アイルランド国立大学卒業後、渡米し、博士号を取得。杏林大学教授などを歴任。日本在住歴30年。2008年『One Hundred Poets, One Poem Each』(英訳・小倉百人一首)で日米友好基金日本文学翻訳賞、日本翻訳家協会日本翻訳文化特別賞を受賞。2016年に伊勢物語の英訳『The Tales of Ise』を出版。2017年、『英語で読む百人一首』を文春文庫より刊行。2019年に、英訳百人一首カルタ『Whack A Waka 百人イングリッシュ』をカワダより刊行。

かささぎの わたせる橋にをく霜の 白きをみれば 夜ぞふけにける

How the night deepens.  
A ribbon of the whitest frost  
is stretched across  
the bridge of magpie wings  
the lovers will cross.

天の川にかささぎが翼をつらねてかけている橋、  
その橋に置いている白い霜を見ると、  
ああ、夜が更けたのだなあ。



『扇の草紙』翻訳コンテンツ「Found in Translation」(2020年)

マクミラン氏が「扇の草紙」英訳の過程で感じた日本の自然美や日本文化の魅力を広く発信するために、アニメーション技術や和歌の世界を表現したデジタルコンテンツ。

国文学研究資料館蔵の屏風「扇の草紙」と絵巻『阿不幾集』(114頁)の高精細画像と、書かれている和歌の原文、現代語訳、マクミラン氏による英訳、エッセイ、研究者による解説が搭載されている。

制作:凸版印刷株式会社 監修:国文学研究資料館 翻訳・監修:ピーター・J・マクミラン

難しさ曖昧さこそ魅力

文字と絵が融合する文芸の在り方に関心を寄せるマクミランさんが翻訳に挑戦したのは、扇型の画面に描かれた「絵画」と、その周囲に書かれた「和歌」を一緒に読み解く「扇の草紙」という二群の作品です。さまざまなバージョンが存在する「扇の草紙」のうち、屏風「扇の草紙」(113頁)と巻子本「阿不幾集」(114頁)に出会ったマクミランさんは、研究者と共に、丹念に作品の読み解きを始めました。

和歌と共に描かれている絵は、必ずしもその歌を直接比



イベント「デジタル発和書の旅 ひるがえる和歌たち」

白拍子とともに和歌合せを行った。



百人一首大会  
「100人ぐりっ首」  
(2018年8月/2019年8月)

マクミラン氏のカルタを用いて開催  
(於立川市柴崎学習館講堂)。立川市  
の中学生が、英語を通じて和歌の  
世界に親しんだ。

©えくてびあん



ピーター・J・マクミラン  
「WHACK A WAKA  
百人イングリッシュ」  
(2019年)

マクミラン氏による英訳  
百人一首カルタ。取り札  
と読み札に、その歌の世  
界観を表現した絵を描き、  
「絵合わせカルタ」のよ  
うにも遊ぶことができ  
るようにしたことにより、  
和歌の世界により親しみ  
やすくなっている。



恋人との密会のために渡る  
「宮中の橋」。マクミランさん  
は、どちらにも解釈できるよ  
う、「the lovers will cross」  
というフレーズを補って英訳  
を行いました。

翻訳する上で苦勞した部  
分にこそ、日本文化の特質を  
見出すことができる、と考  
えたマクミランさんは、翻訳の過  
程で浮かんだ「問い」を手が  
かりに「扇の草紙」を読み解  
き、日本文化の魅力を伝える  
デジタルコンテンツ「Found  
in Translation」の開発に  
取り組みました(制作・凸版  
印刷株式会社)。

ジュアラル化したものではな  
く、謎解きを楽しむようなも  
のもあります。たとえば「か  
ささぎのわたせる橋にをく霜  
の白きをみれば夜ぞふけに  
ける」という歌には、傘をさ  
した二羽の鷺が橋を渡ってい  
る絵が添えられており、「か  
ささぎ」という言葉を導く判  
じ絵のようになっていきます。

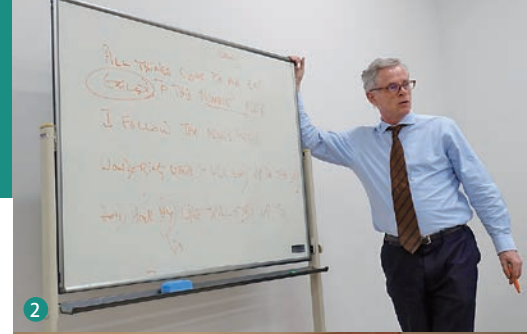
また、さまざまな解釈が可  
能な歌も。「かささぎの」の歌  
に登場する「橋」には二つの  
解釈があります。ひとつは、  
年に一度七夕の日にだけ天の  
川にかけ、織姫と彦星の束  
の間逢瀬を手引きする「鵲  
橋」、もうひとつは殿上人が

ワークショップを経て

時には謎解きが求められる  
「扇の草紙」について、研究者と  
共に読解してゆく過程で、日本  
と西洋の文化的背景の違いや、  
それぞれの魅力について議論を  
交わしたり、英語の詩として表  
現する際に、さまざまな要素を  
どのように取舍選択すべきか検  
討し、推敲を重ねた。また、「扇  
の草紙」の魅力を十分に表現で  
きる形で翻訳を発表するために、  
凸版印刷株式会社を交え、議論  
を繰り返した。



1



2



4



3

「Found in Translation」を活用しながら、『扇の草紙』の魅力について語る  
マクミラン氏とキャンベル館長の対談動画  
[https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist\\_contents/macmillan/ogi2/index.html](https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/artist_contents/macmillan/ogi2/index.html)



古典インタプリタ日誌(ワークショップ詳細)  
<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/diary/index.html#peter>



1 完成した「Found in Translation」を活用し、キャンベル館長と共に日本文化の魅力を語り合う。  
2 「扇の草紙」のより良い翻訳の在り方を、研究者と共に追求した。 3 4 「ひるがえる和歌たち」で「扇の草紙」について語る。

ピーター 9



おぎ そうし  
『扇の草紙』 江戸初期写 6曲1隻(屏風1曲:縦95.5cm×横284.4cm、料紙:縦31.8cm×横24.0cm)

扇絵とそれにちなむ和歌を描いた「扇の草紙」と総称される作品群のひとつ。「扇の草紙」は、実際の扇絵を見せて画題の和歌を当てる遊びから生まれたとされ、室町後期から江戸前期にかけては絵巻や奈良絵本にも仕立てられた。本作は奈良絵本の料紙を屏風に貼り付けたもので、扇絵の背景に扇同様、風に縁のある柳の木を描く点に特徴がある。青々とした春の柳や雪の積もる冬の柳なども見え、四季を描き込もうとする意識がうかがえる。(恋田知子)

Commentary

ピーター 4



つるまるもん うた  
『鶴丸紋ちらし哥かるた』 江戸中期写 かるた 1箱(上下札各100枚)

歌仙絵入りの百人一首かるた。箱は二重で、漆塗内箱の鶴丸紋から一説に日野家旧蔵かとする。読み札は上部に作者名と上句、下部に歌仙絵を描き、取り札は下句散らし書き、いずれも帙の内側に舞楽の図を描く。江戸初期の図様では崇徳院を臣下用の高麗縁量に配するが、本作では天皇用の纏網縁量に配する。また、ともに纏網縁量を配されることの多い祐子内親王家紀伊と待賢門院堀河のうち、後者のみ高麗縁量とする点に特徴がある。(岡田貴憲)

Commentary



おうぎしゅう  
『阿不幾集』 室町末期写 卷子1軸 縦18.2cm×全長380cm

通常の絵巻の半分ほどの大きさの「小絵」と呼ばれる絵巻の「扇の草紙」。扇流しのように傾きをもたせ、黒骨を付けた扇面が全30図描かれ、対応する和歌30首を添える。画風はおおらかで素朴ながら、背景の景物まで省略せずにしっかりと描き、物語絵の趣を感じさせる。上質の鳥の子紙の料紙に金泥・銀泥・丹を豊富に使用した豪華絵巻。表紙や絵巻を収める内箱も制作当時のものと考えられ、箱表に「阿不幾集」と墨書されることから、「あふき集」と称されていたことがわかる。(恋田知子)



ならえまめおぎすずめん  
『奈良絵豆扇図面』 江戸前期写 画帖1帖 縦14.1cm×横17.8cm

もと冊子本か絵巻であった「扇の草紙」から、扇絵のみを扇骨の部分まで切り抜いて画帖に貼り付けたもの。他に例を見ない形式の「扇の草紙」で、書名は本作を収める帙に貼られた後題籤に基づく。和歌が付されていないため、画題の特定できない扇絵もある。杜若の咲き乱れる入り組んだ水辺に佇む貴公子の扇絵は、『伊勢物語』第九段「東下り」、八橋での和歌「から衣きつつなれにしましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ」を描いたものであろう。(恋田知子)

小論文

# 『扇の草子』の魅力 —— 三つの扉と三つの世界 ——

Yasuhara Makoto

安原 眞琴

立教大学  
兼任講師

古典文学の中には、歴史に埋もれてしまつて知られていないものがたくさんある。また、その中には、知らないともったいないものもたくさんある。『扇の草子』もその一つだ。戦国時代末期から江戸時代初期の人たちに大変人気があつたようなのに、今となつては、どんな人たちが制作し、どう享受されていたかさえよく分からない。

でも、どうやら、古典文学と聞くとちよつと堅苦しさがあるが、『扇の草子』は（読むよりも）見るく、且つ（文

学)よりも(遊び)との親和性が高い、簡単に言えば、見るだけで楽しめる作品群のようである。伝本には原型を留めるものは少なく、断簡と呼ばれる、冊子本から切り離された一頁分しか残っていないものが多いのだが、これも、一頁でも持っていたい、眺めていたいという人が、たくさんいたことを物語る。

また、断簡も含めた伝本数は、毎年のように巷間から発見されるなどして増えており、管見の限り二〇二〇年現在五五本にのぼるが、ほとんどが十七世紀前後に作られたものなので、この時期の需要が高かったこともわかる。なお、『扇の草子(草紙)』とは全伝本の総称で、実は伝本にはさまざまな書名が付いているので、便宜的に付けられたのである。

さて、魅力はいろいろあるが、ここでは、扉と世界にたとえながら三つあげたい。『扇の草子』は、扇面の枠内に描かれた(絵)と、その周囲に散らし書きされた(和歌)から成るが、まず(和歌)という扉を開こう。

した(遊び)の世界である。伝本には、扇絵は挿絵として描かれているが、このような形態になる以前は、本物の扇に絵が描かれた実際の扇絵を見せて、それが何の和歌を描いたものかを当てる、なぞなぞのような(遊び)が行われており、『扇の草子』はそれを基に冊子本や絵巻といった体裁にまとめられたもののようなのである。

東京国立博物館所蔵の『月次風俗図屏風』は、その(遊び)の世界がどのようなものだったかを伝えてくれる貴重な絵画資料である。それによれば、扇絵から和歌を当てるなぞなぞ遊びは、裕福そうな子ども(小学一年生くらいの子)のための、野外のお花見パーティーにおけるゲームとして楽しまれていたようである。この遊びには、楽しみながら和歌を覚える、教育的な側面もあったのだろう。

見てきたように『扇の草子』は、三つの扉と三つの世界を内包する、豊富で複雑な魅力を持っている。

すると、四季折々の自然の美しさから、喜怒哀楽といった繊細な心情まで、日本人のさまざまな心の世界に誘われる。

次に見えてくるのは、(和歌)と(絵)が融合した扉である。テキストを(主)、それを説明する絵を(従)とする絵本は多いが、『扇の草子』の場合、両者は不可分の関係にあるので、扉も二つで一つになっており、その扉を開けると、和歌や絵を単体で見ているときには気付かなかった、新たな世界に出会うことができる。

例えば、算数の九九を詠んだ(和歌)と、一頭の猪の(絵)がある(挿図参照)。もちろんそれぞれ別々に鑑賞することもできるが、和歌と絵で一如の扉を開けると、動物の猪(しし)と九九の四四(しし)とが二重写しになった、不思議な世界が立ち現れる。

最後に、(扇)という扉を開くと、さらに意外な世界に逢着する。それは、(文学)というジャンルを超越



挿図 架蔵『扇の草紙』伝嵯峨本(複製)。

もつとも魅力は三つに留まらない。むしろ、見る人ごとに異なる扉と世界が現れる、魅力の尽きない作品群と言った方がよいかかもしれない。ただ、扉は常に目に見えらるには限らない。それを探すコツは(和歌)や(絵)、(文学)や(遊び)といった既存のジャンルに拘らず、心と頭を柔軟に解き放つことにありそうだ。

安原真琴(立教大学兼任講師)

著書に『扇の草子』の研究―遊びの芸文』(ベリカン社、二〇〇三年)、共著『A Book of Fans』(Karolinum、二〇一六年)、映画『Last Geisha-Madame Minako』(makotooffice、二〇一三年)撮影・編集・制作などがある。

# ないじえるというプリズムで 日本文化を再考察する重要さ

塩野入 弥生



## Profile

塩野入 弥生 Yayoï Shionoiri

クリス・バーデンのエステートとナンシー・ルービンススタジオのエグゼクティブ・ディレクターとしてバーデンの遺作の管理と、ルービンスのアーティスト活動の促進を行う。創造産業分野で活躍するクライアントを法律面で支援する東京のシティライツ法律事務所の米国アライアンスパートナーでもある。アートと法律の分岐点についての記事を多数発表。アーティストのマネージメント、契約書の取り交わし、著作権に関する問題、そして展示に関わる法務全般に造詣が深い。米日財団日米リーダーシッププログラムフェロー、そしてアジアソサエティ Asia 21ヤングリーダーも務める。ハーバード大学卒業。コーネルロースクール修了。コロンビア大学日本現代美術史修士課程修了。(www.yayoishionoiri.com)

それは、二〇一九年八月に遡る真夏日。立川柴崎学習館の講堂に足を一歩踏み入れると、張り詰める空気の中、中学生の皆さんが、対面し正座して、一心不乱に集中している光景が目に入りました。皆さんが没頭しているのは、小倉百人一首。それも、ピーター・J・マクミラン先生の英訳版でのかるた大会です。

例えば、光孝天皇の十五番の歌は、マクミラン先生の英訳  
だとなりなります。

For you, I came out to the fields to pick the  
first spring greens.

All the while, on my sleeves a light snow  
falling.

抑揚をつけた詠み方だと、朗唱のようにも呪文のようにも聞こえるのですが、最初は、耳で聞き慣れた日本語の美しい言葉とは全然違う英語の節に、若干、違和感を感じたことも確かでした。しかし、かるた大会が進むにつれ、マクミラン先生の英訳が、自然と頭の中で日本語に変換される不思議な感覚を覚えました。北アメリカで育ち、大人になってから日本社会に触れ合う機会が増えつつも、仕事上は、英語

を主要言語としている者としては、このような二カ国語の相互変換は言語の変換のみでなく、異文化の境目を縮める行為が目当たりで行われているようで、とても感慨深く拝聴させていただきました。

日本語と英語は、言語としての文法はもとより、コミュニケーションの戦術や、ニュアンスなども大きく異なります。そして、文化の象徴でもある言葉は、書かれたものでも、口頭で伝えられたものでも、生きている証として歴史を構成かつ記録する手段でもあります。そうすると、日本を日本たるものに定義つける一要因でもある日本語とその記録を綴った古典籍を、様々な切り口から再考察することが、ないじえる芸術共創ラボの存在意義なのかもしれません。結果として形になるものは、現代アーティストが時空を超えての古典籍との合作だったり、かるたのような伝統的な遊戯が新しい形に蘇ったり、など、多種多様ですが、一人一人が携わったその過程こそ、日本語、そして、日本文化の奥深さ、奥ゆかしさ、華やかさ、哀れなどを再発見できることが素晴らしい、と感じます。

ないじえる芸術共創ラボは、古典籍という紙媒体を扱っている研究所にも関わらず、ネット上での情報発信を積極的に行っていることも、海外にいる自分としては、嬉しい限りです。もちろん、百聞は一見にしかずなのですが、サイトで動画配信やインスタグラムなどで疑似体験ができることは、ないじえる芸術共創ラボの「現在」を知ることができま  
すし、活動を記録する大切な見聞録にもなることを願って  
止みません。

古いものは、解読しづらいと感じられがちな今日この頃ですが、情報の宝庫であることも間違いないと思います。ないじえる芸術共創ラボは、違う分野の専門家と一緒に、文化・時空・媒体までを越境するコラボレーションを通じて、その探究の楽しさや醍醐味を私たちに教えてくれているように思います。ないじえる芸術共創ラボに携わっているロバートキャンベル館長や有澤知世先生、そして国文学研究資料館の神作研一先生などの日々のご尽力や研究結果がこれからも、より多くの方に知っていただけますように。そして、これからも、ご活動を遠い空の下から応援していきます。

Yamada Takuji

# 山田卓司

情景作家

## 江戸時代の風景が

今、蘇る

旅の要所であった「東海道五十三次」の風景を、鉢植えのなかで作ってしまおうという江戸時代の発想が、令和の今、「情景王」の手で現実に。東海道五十三次の中に入り込み、時空を超えて旅するような感覚に陥る三体のジオラマたち。  
さあ、江戸時代へタイムスリップしよう。



●主な受賞歴 '80年「第8回タミヤ人形改造コンテスト」金賞、'88年「第16回タミヤ人形改造コンテスト」金賞、'94年テレビ東京「TVチャンピオン」第1回全国プロモデラー王選手権 優勝、'95年テレビ東京「TVチャンピオン」第2回全国プロモデラー王選手権 優勝、「ユーロ・ミリテール」(英国)情景部門 金賞、'98年テレビ東京「TVチャンピオン」第5回全国プロモデラー王選手権 優勝、'99年テレビ東京「TVチャンピオン」第6回全国プロモデラー王選手権 優勝

●代表的な作品集 情景王—山田卓司作品集 (ホビージャパン刊)、情景王 The diorama King! (エクシング刊 Windows, Mac Hybrid CD-ROM)、LABOR in Action TAKUJI YAMADA DIORAMA WORLD (バンダイ刊)

1959年(昭和34年)静岡県浜松市に生まれる。幼い頃より模型工作を趣味とし、中学時代には地元のデパートで行われた模型コンテストで毎年入賞。高校時代には模型同好会を発足、社会人の模型サークル「ダス・ライヒの会」設立にも参加する。78年に上京、日本工学院専門学校に入学。在学中に模型雑誌『月刊ホビージャパン』に執筆を始める。卒業後は工業模型製作会社にて、原子力プラントや工業模型の製作に従事。87年、浜松市に戻りフリーのプロモデラーとして活動開始。模型雑誌で作品を発表する傍ら、商品原型、イベント用情景を製作。静岡、浜松、鳥取、沖縄などでジオラマ作品展を開催、模型教室の講師、テレビ出演など多数。





山田卓司「鉢山図会 日本橋」(2020年) ジオラマ作品 35.5cm×36.5cm×29cm

とうかいどう ごじゅうさんつき はちやまず え  
『東海道五十三駅 鉢山図会』(日本橋)

木村唐船作・歌川芳重画 嘉永元年(1848)刊  
半紙本 2冊

素材となった歌川広重画、保永堂版浮世絵『東海道五拾三次』の「日本橋」には、遠方に火の見櫓、手前に日本橋がある。橋上に大名行列先頭の先箱とおおとりけ、大鳥毛の長槍を高く立てた足軽、その後ろに打裂羽織の徒士衆、画面左側に魚河岸から魚を仕入れた棒手振りが描かれている。一方『鉢山図会』には、浮世絵には存在しない富士山と江戸城を加えて、道中双六振り出し図に相応しい伝統的図柄になっている。(山下則子)



作品紹介  
古典籍解説

蘇る「東海道五十三次」

とうかいどう ごじゅうさんつき はちやまず え  
『東海道五十三駅 鉢山図会』

木村唐船作・歌川芳重画  
嘉永元年(1848)刊  
半紙本 2冊

歌川広重画の最も有名な保永堂版浮世絵『東海道五拾三次』を基に作成した鉢山を絵画化し、多色摺絵本にしたもの。鉢山とは、盆に石や土を盛り、植物なども使って立体化した盆栽に類似した作り物をいう。一方、それより早くから存在した中国風の同種のもは、「古景盤」と称され、中国風と日本風は厳密に区別される。現在世界的なブームとなっている、東洋の園芸文化である自然の縮景(盆栽)の一変型といえる。(山下則子)

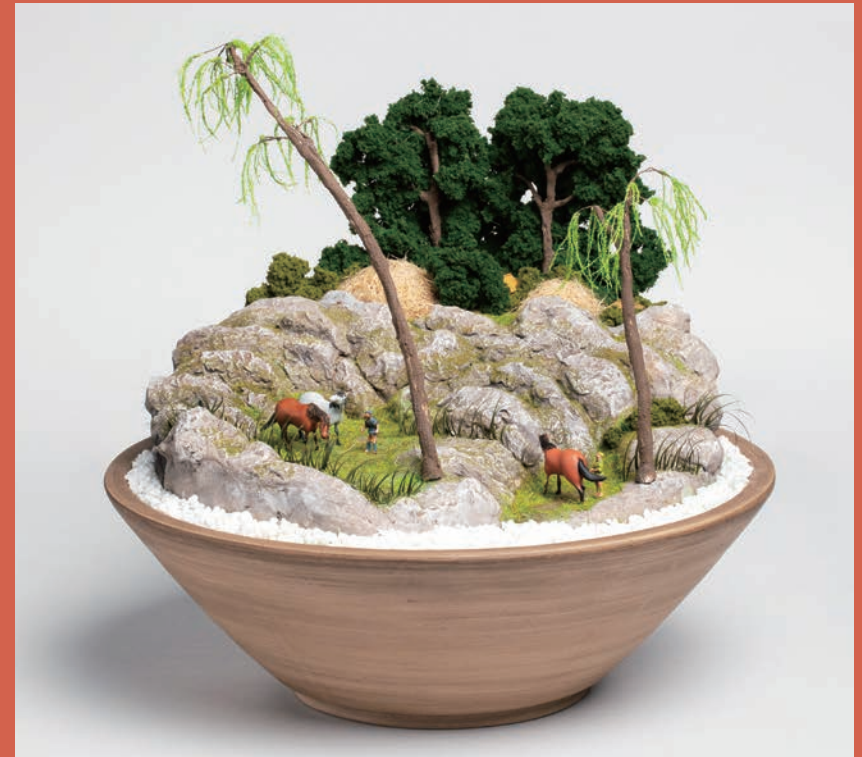


山田 8



山田卓司「鉢山図会 京三条」(2020年) ジオラマ作品 33cm×29cm×30cm

山田 7



山田卓司「鉢山図会 池鯉鮒」(2020年) ジオラマ作品 36.5cm×35cm×37cm

とうかいどう ごじゅうさんつき はちやまず え  
『東海道五十三駅 鉢山図会』(京三条大橋)

木村唐船作・歌川芳重画 嘉永元年(1848)刊  
半紙本 2冊

素材となった歌川広重画、保永堂版浮世絵『東海道五拾三次』の「京師」には、画面中央に三条大橋を横たえ、その後ろに町並み、背景に東山の山並みとその背後に比叡山を思わせる茶色い高山が描かれる。『鉢山図会』は浮世絵に忠実に、手前に三条大橋、その後ろに町並み、更に後方に高山が描かれている。町並みに描かれる複数の横線は、遠方風景の距離感を表す「すやり霞」という伝統的表現方法である。(山下則子)



山田 5



とうかいどう ごじゅうさんつき はちやまず え ちりふ  
『東海道五十三駅 鉢山図会』(池鯉鮒)

木村唐船作・歌川芳重画 嘉永元年(1848)刊  
半紙本 2冊

素材となった歌川広重画、保永堂版浮世絵『東海道五拾三次』の「池鯉鮒」(現在は知立と表記)は、『東海道名所図会』巻之三の挿絵に「池鯉鮒駅の馬市」として載る、初夏の馬市の情景を基にして、浮世絵では緑の色調の地平線を設けた原野と改め、談合松(馬の値段を決める場所)と群衆を奥の中央に据えた図とした。一方『鉢山図会』では、起伏のある地形の中に、柳が二本生え、馬三頭、馬方二人が描かれている。(山下則子)



山田 4



山田 9



やくしや み た て どうかいどう ごじゆきんつぎ  
『役者見立 東海道五十三駅』  
(程ヶ谷駅 ぬおかる)

三代目歌川豊国画  
嘉永五年(1852)三月改印  
大判錦絵(縦35.1cm横25.0cm) 1枚

天保四年(1833)三月上演歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』四段目裏初演の浄瑠璃道行『道行旅路の花婿』は、塩判判官が高師直に斬りつけた時に居合わせなかった、判官の近習早野勘平を、恋人の腰元お軽が、実家のある京山崎に連れて行く道中を舞踊化したもの。鎌倉から戸塚の山中を越えて行く。背景は帷子川にかかる橋で『江戸名所図会』所載の挿絵に類似する。お軽は歌舞伎役者、初代坂東しうかの似顔で描かれている。(山下則子)

山田 10



やくしや み た て どうかいどう ごじゆきんつぎ  
『役者見立 東海道五十三駅』  
(戸塚駅 早野勘平)

三代目歌川豊国画  
嘉永五年(1852)三月改印  
大判錦絵(縦35.1cm横24.9cm) 1枚

天保四年(1833)三月上演歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』四段目裏初演の浄瑠璃道行『道行旅路の花婿』は、鎌倉から京山崎に落ち行く途中の、戸塚の山中と設定されている。歌川広重画『東海道五拾三次』「戸塚」には休処が大きく描かれるが、本図では辺鄙な山野が背景となる。役者は八代目市川團十郎。保土ヶ谷駅の初代坂東しうかとはよく同座した。画題枠に鷺が描かれるのは、道行を邪魔しようとする鷺坂坂内を仄めかすか。(山下則子)

山田 11



やくしや み た て どうかいどう ごじゆきんつぎ  
『役者見立 東海道五十三駅』  
(京二 真柴久吉)

三代目歌川豊国画  
嘉永五年(1852)八月改印  
大判錦絵(縦35.1cm横25.0cm) 1枚

『役者見立 東海道五十三駅』目次の京は五右衛門で、本作は其の二の久吉。安永七年(1778)初演歌舞伎『金門五三桐』に、京都南禅寺の山門に登った大盗賊の石川五右衛門が、桜満開の春景色を愛でていると、巡礼姿の久吉が山門の柱に「石川や〜」の歌を書き付け、五右衛門が投げた手裏剣を柄杓で受け止める場がある。背景は歌川広重画『東海道五拾三次』を利用し、「すやり霞」も描かれる。役者は三代目尾上菊五郎。(山下則子)

山田 12



『東海道名所図会』

秋里籬島作 竹原春泉斎他画  
寛政9年(1797)刊  
大本 6巻6冊

『都名所図会』(安永9年(1780)刊)以降、河内をのぞく畿内(山城、大和、和泉、摂津)の各名所図会を次々と手がけていった籬島が、はじめて東国を対象とし、かつ国単位ではなく海道に沿って執筆したもの。籬島は実地調査を行い、東海道に関する多くの先行書を博捜することにより、都を起点に東海道の名所をくまなく記した総合的な地誌として高い完成度を誇る。絵師は竹原春泉斎を筆頭に約三十名の布陣となっており、なみなみならぬ力の入った企画であったことが窺われ、実際、他の名所図会同様、好評を博したようである。(木越俊介)



役柄の人物が描かれる作品、特に何も記されず目次とは異なる役柄の人物が描かれる作品、「品川川崎間」のような間の宿シリーズなどがあり、正確にはつかみきれない。しかもそれがほぼ同年に改印を受けており、画工はもとより彫師や摺師もさぞ目まぐるしく働いたのだろうかと推測されるのである。

さて、中世から近世初期にかけて、高野山や河内の四天王寺などの信仰の中心地に繋がる街道を舞台とした語り物が多く生み出されたことは、阪口弘之氏のご研究（『古浄瑠璃・説経研究 近世初期芸能事情 街道の語り物』二〇二〇年刊）などで詳細に明らかにされた。例えば高野山は「苜蓿道心」「滝口横笛」をめぐりなど、四天王寺は「しんとく丸」「さんせう太夫」などである。これは語り物を語りついで声聞師や芸能民が、聖地と街道要衝を結ぶようにして活動し、信仰の支持基盤を庶民層へと拡大していったこと

を表している。

それでは近世後期の『役者見立 東海道五十三駅』の爆発的流行は何を表しているのか。これは江戸を起点とする都市の庶民達が、信仰と観光を兼ねて東海道を頻繁に行き来し、日頃熱中している歌舞伎世界を、実際の東海道来敷衍してみたということであろう。

例えば品川宿は幡随院長兵衛（五代目松本幸四郎）、川崎宿は白井権八（五代目岩井半四郎）である。これらは安永八年（一七七九）森羅万象（森島中良）ら合作の浄瑠璃で、後に歌舞伎化された「驪山比翼塚」の人物である。両宿の中間にある鈴ヶ森で、追い剥ぎ達に囲まれて見事に斬り捨てた美しい若衆の権八と、江戸の侠客長兵衛が会って義兄弟になる場を踏まえている。目黒にある権八小紫の比翼塚にちなんだ話でもある。後世には川崎宿手前の多摩川下

流の六郷渡りで、権八が立腹を切る（立って切腹する）演出も生まれ、間の宿シリーズではそれが描かれる。

大磯宿は『曾我物語』に登場する大磯の虎（七代目岩井半四郎）、もう一つは虎の恋人である十郎祐成（十二代目市村羽左衛門）である。中世の『曾我物語』は、唱導家や虎などと名乗った比丘尼達による語り物から成立したかとされる。この凶の虎は、格式の高い傾城の髪型である伊達兵庫に、豪華な鼈甲の笄や挿し櫛をしている。十郎は、千鳥模様の肩当てをしたた橋模様の小袖、赤の下着が見える遊治郎である。苦心の末に父の敵討ちをした曾我兄弟の話は、御霊信仰と結びつき様々な歌舞伎に創作された。荒事として豪放に演じられた五郎とは反対に十郎は和事でも演じられた。それが反映した描かれ方と言えよう。

小田原宿は飯沼勝五郎（十一代目森田勘弥）、箱根

宿は初花（六代目岩井半四郎）、箱根宿其の二は下部筆助（四代目中村歌右衛門）である。これらはすべて『箱根靈驗覺仇討』の世界の人物で、十一段目の塔ノ沢の滝に打たれて、夫の脚を治そうと祈願する初花亡霊のけなげさが、ケレン的演出で表現される部分が見せ場であった。

『役者見立 東海道五十三駅』は、「東海道」が現代ではほとんど忘れ去られてしまった多くの歌舞伎・浄瑠璃や文学の舞台であり、幕末の庶民を熱狂させた世界を想起させるものであったことに気付かせてくれる。歌舞伎・浄瑠璃・文学による「東海道」の文化遺産化作品とも言えよう。

# デジタル発和書の旅路

高羽 将人



## Profile

高羽 将人 Takaba Masato

凸版印刷株式会社文化事業推進本部所属。凸版印刷に入社後、一貫して文化事業推進本部において、文化財をテーマとしたコンテンツ制作および活用の企画などにプロデューサーとして関わる。2018年からは、国文学研究資料館との共創プロジェクトを担当。

二〇一八年十月、国文学研究資料館(以下、国文研)と弊社による芸術共創プロジェクト開始の記者発表が行われた。このプロジェクトは、「日本文化の多様性や魅力をデジタルコンテンツで再創造し発信する」もので、国文研は所蔵の和書を中心とした資料及び研究成果を、弊社はデジタル化・コンテンツ化の知見を持ち寄ることで、共創を行うものである。この時、具体的活動の一つとして挙げられたのが、デジタルコンテンツを用いたイベントシリーズ「デジタル発和書の旅」の開催であった。おもに「ないじえる」の成果をその対象とし、シリーズ名は、和書のデジタルデータを活用することで、時代と空間を旅する、というコンセプトによって、名付けられた。

発足前のトライアルも含めて、私がプロデューサーとして関わった「旅」は、以下の通りである。

- ①二〇一八年三月九日「湯とアートが鳴子で出会う」(鳴子温泉早稲田栈敷湯)  
『扇の草紙』・ 鍬形蕙斎『略画式』高精細アーカイブデータを使用
- ②二〇一八年六月二十三日「山村造」・ 蕙斎に逢いにゆく

(国文学研究資料館)

鍬形蕙斎『略画式』高精細アーカイブデータを使用

- ③二〇一八年十二月九日「ひるがえる和歌たち ― 扇と翻訳で古都に遊ぶ ―」(有斐斎弘道館)

『扇の草紙』高精細アーカイブデータを使用

- ④二〇一九年十月五日「古典籍×○○ラボ ― であう・うみだす・みとおす ―」(FabCafe Kyoto)

和書形態の時代別表示コンテンツ『和書ロード』を使用

- ⑤【番外】二〇二〇年三月二十五日「扇の草紙」翻訳コンテンツ「Found in Translation」完成披露会

『扇の草紙』翻訳コンテンツ「Found in Translation」制作

※「ロナの影響」により中止の「コンテンツ」の概要を紹介する動画を配信

イベントおよびコンテンツのプロデュースにあたり、私が常に心がけたことは、関連する資料のデジタル化が目的ではなく、デジタルはあくまで表現するための手法である、という点である。今、「旅路」を振り返ると、最も手法としてデジタルを活かすことができ、また評価を得たのは、④でお披

露目した『和書ロード』であったろう。和書の(卷子本や冊子本などの)形態、とその時代による変遷を同時に視覚的に表現するコンテンツである。実物の展示では、物理的に形態と年代を同時に表現することは難しいが、デジタルでは、その二つを縦軸・横軸にすることによって、表現することができた。

「旅」には、楽しさが必要だ。五回の「旅」を通じて、弊社が担うべきことは、「旅」の参加者に対して、研究成果と世間、過去と現在などを橋渡しする「旅」のコーディネートとして、楽しさを提供することにある、という点を改めて、実感した。共同プロジェクトの担当者として、「ないじえる」の関係者として旅の企画に関わることができたのは、大変光栄で、得難い経験であった。

「ないじえる」をきっかけに始まった「デジタル発」のこの旅も、with「ロナ」の時代においては、これまで以上にデジタルが寄与する部分が大きくなるはずであり、例えばオンライン開催を行うことで、より多くの方々に、和書の魅力を伝えていくことも可能である。そして私自身、これからの「デジタル発和書の旅」を楽しみにしている。

それは、知に触れてゆく二人旅。  
個性的なクリエイターたちが構築する多様な世界観と、その作品世界への礎となった古典籍とをゆるやかに繋げ、展示空間をデザインする映像作品を、ビジュアルデザインスタジオ WOW が制作。

「伊勢物語」初段の「初冠」をモチーフにした本作は、悲恋の物語「芥川」、関東への道行「東下り」を経て、舞台を十八世紀頃の繁華な江戸へと移し、そしてエキゾチックな薫り漂う異国の文様が、さらに広い世界へと視線を誘う——。  
「時の束」II 古典籍を披ひらき、時空を超えた旅を表現する、壮大な作品。

Guest creator  
**WOW**  
ビジュアルデザインスタジオ



東京、仙台、ロンドン、サンフランシスコに拠点を置くビジュアルデザインスタジオ。  
CMやコンセプト映像など、広告における多様な映像表現から、さまざまな空間におけるインスタレーション映像演出、メーカーと共同で開発するユーザーインターフェイスデザインまで、既存のメディアやカテゴリーにとらわれない、幅広いデザインワークをおこなっている。



「知の旅」(2021年)

『伊勢物語』、『江都名所図会』、『装剣奇賞』の三作品(すべて国文学研究資料館蔵)を映像で立体化。作品の中の世界やモチーフの中を一人称視点で通り抜けていくことで、各作品に散りばめられている知に触れてゆく一人旅をテーマにした映像作品。(WOW)



## 古典籍との(基本的な)ふれあい方について

### 古典籍に触れる前に

古典籍は、清潔な素手で扱います。  
手を綺麗に洗い、腕時計や指輪などの貴金属をはずして、紙を傷めたり、汚したりしないようにします。本に落ちかかると危険なので、長い髪はまとめ、長いネックレスなどもはずします。

### 古典籍をひらく環境

清潔な机の上でひらくと安心です。当館では薄様紙(薄い和紙)の上でひらいています。  
古典籍は、水やボールペンのインクなどが苦手です。  
それらは本をひらく机の上に乗せないでください。

### 古典籍をひらくときは

文字や絵の書いてあるところを触ったりこすったりすると、痛んでしまいます。  
冊子本は紙の下端をつまんでめくりましょう。昔の人たちもその場所を持ってめくっていたらしく、手擦れの跡があるので観察してみましょう。  
鉛筆だけでメモをとりましょう。ゴミが交じらないように、消しゴムは使いません。

国文学研究資料館をはじめ、全国各地にあるさまざまな資料館・文庫など、古典籍を所蔵する機関は数多く、必要な手続きを行えば、研究者でなくとも利用できる施設や資料は案外たくさんあります。東京の神保町や京都の寺町などの古書店街にも古典籍を扱う専門店があります。そういう店も参加する各地の古本まつりなどは、最も気軽に古典籍を手にとることができる機会かもしれません。

古典籍は和紙で作られているので、実はとても丈夫です。そして、分からないことは、聞けば教えてもらえます！

汚さない、傷つけないことを意識しながら、江戸時代、もしかすると、もっと前の時代の人が読んでいた本を手に取り、さまざまなデザインを観察したり、その本の辿ってきた時間を想像したりしながら楽しんでください。





## 新日本古典籍総合データベースとは…

複数の機関が所蔵する古典籍の情報や、その高精細画像を一度に検索できるポータルサイト(無料)です。

国文学研究資料館が、さまざまな機関の協力のもとで構築しています。

## なにができるの？

- WEB環境さえあれば、国内外のあらゆる機関に所蔵されている古典籍画像に、どこからでもアクセス可能。
- そのため、たとえば別の場所(日本とイタリアなど)に所蔵されている資料を、同じ画面上に表示して、比較することや、貴重な資料を模写することなどができます。
- 公開されている画像のうち、「CC BY-SA 4.0」の表記があるものは、クレジット表示をするだけで、複製や改変を含め、自由にご利用いただけます。  
(「CC BY-SA 4.0」表記がないものについては、資料毎に利用条件をご確認ください)  
クレジット表記の方法について→<https://kotenseki.nijl.ac.jp/page/about.html>

## データベース活用の一例

### 1 新日本古典籍総合データベース (<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>) を開く

このページ上部のQRコードからご覧頂けます。

データベースのトップページ

検索画面



### 2 検索画面に好きなキーワードを入れてみる

例) 絵本／画譜／源氏物語 …… 書名や作者名、ジャンル名などで検索可能。

→今回は「画譜」で検索。1,003件ヒット!

ヒット数

タイトルごとに、さまざまなバージョン・所蔵先の資料が表示

さらに絞り込みをかけることができる



### 3 表示する資料を選ぶ

→長崎で医学と絵を学んだ森蘭斎筆の「蘭斎画譜」に注目。22件がヒット。画像データがある資料には画像アイコンがある。

さまざまな所蔵先に点在する「蘭州画譜」が表示される。それぞれ状態などが異なる。

所蔵先が表示される

国文研にある「蘭斎画譜」という意味

今回は画像アイコンがある国文研の本を選択。



### 4 画像を表示し、ダウンロードする

国文研蔵の「蘭斎画譜」の画像ページ <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200014780/viewer/32>

好きなコマを選択すると、画像の拡大をして観察したり、デジタルアーカイブ模写をしたりすることができる。

「CC BY-SA 4.0」表記がある資料は、ダウンロードのうえ複製制作、加工も可能。(所蔵先により利用規定が異なる)

「タグ」検索で、似た資料が検索できる。

ダウンロードボタン

資料の詳細な情報を記載。

「CC BY-SA 4.0」表記。国文研の資料には全てついている。





「ないじえる芸術共創ラボ」に関する情報は、こちらからご覧いただけます。



公式WEBページ

<https://www.nijl.ac.jp/pages/nijl/>



公式Instagram

[https://www.instagram.com/nijl\\_arts\\_initiative/](https://www.instagram.com/nijl_arts_initiative/)



公式Twitter

[https://twitter.com/arts\\_nijl](https://twitter.com/arts_nijl)



公式Facebook

<http://www.facebook.com/nijlartsinitiative/>

ないじえる芸術共創ラボ展

時の束を披く—古典籍からうまれるアートと翻訳—

展示会解説 図録

2021年2月10日 発行

企画・発行 国文学研究資料館

協力 凸版印刷株式会社

